名城大学FD活動報告書

Meijo Faculty Development activity report

平成25年度

名城大学
FD委員会

目　　次

1．はじめに
- 平成25年度のFD活動を振り返って…… 1
ＦＤ委員会委員長　森川　　章

2．平成25年度FD活動一覧…… 3

3．平成25年度FD委員会
- 委員構成…… 7
- 活動記録…… 9

4．平成25年度各学部のFD推進組織活動報告…… 13
- 法学部・法学研究科
- 経営学部・経営学研究科
- 経済学部・経済学研究科
- 理工学部・理工学研究科
- 農学部・農学研究科
- 薬学部・薬学研究科
- 都市情報学部・都市情報学研究科
- 人間学部・人間学研究科
- 総合学術研究科
- 法務研究科
- 大学・学校づくり研究科
- 教職センター

5．トピックス
- 第15回FDフォーラム実施報告
  - 第15回FDフォーラム実施報告…… 45
  - 所属別参加状況…… 46
  - 参加者アンケート集計結果…… 47
  - 当日配布資料…… 55
- 教育功労賞表彰報告…… 66

6．資料
- FD委員会要項…… 67
- 平成25年度所属別FD活動参加状況…… 69

7．おわりに
- 編集後記…… 71

大学教育開発センター

１．はじめに

平成25年度のＦＤ活動を振り返って

FD 委員会委員長

森　川　　章

平成25年度は、名城大学のＦＤ活動における一大転機となりました。

周知のように、平成23年度に就任した中根学長は、就任時に発表した「教学執行部方針と課題」の中で「ＦＤへの取り組みの見直し」を喫緊の課題とし、「学部・研究科主体のＦＤ」の方針を示しました。平成23年度、24年度のＦＤ委員会は、この学長提案を受けて、一方では従来のＦＤ活動を継承・発展させながら、他方では従来のＦＤ活動の有用性や問題点を吟味・検討することに注力してきました。

このＦＤ委員会の検討結果は、一方では従来の活動は有意義であること、つまりＦＤフォーラムや授業改善アンケート、Ｔ＆Ｌ　ＣＡＦＥ、教育年報、等々の活動は有意義なものであり今後も続けられるべきであることを確認するとともに、他方では学長提案の課題を遂行するためには、従来のＦＤ活動の考え方や枠組みを再構築することが必要であるとの認識を示しました。この検討結果に基づくＦＤ活動の新たな枠組みは、大学協議会に提案され、承認されました（平成25年２月８日）。

このＦＤ活動の新たな枠組みの要点を示せば、次のようになっています。

１）＜本学ＦＤ活動の再定義＞

本学のＦＤ活動を①授業・教授法の開発【ミクロ・レベル】、②カリキュラム・プログラムの開発【ミドル・レベル】、③組織の教育環境・教育制度の開発【マクロ・レベル】の枠組みで捉え直す。同時に、本学のＦＤ活動の定義を広く捉え、①から③までを包含することとする。

２）＜各学部・研究科等におけるＦＤ活動＞

各学部・研究科等主体のＦＤ活動に向けて、各学部・研究科等のＦＤ組織が①から③までを包含したＦＤ活動を進めることとする。

３）＜ＦＤ委員会の位置づけ＞

各学部・研究科等主体のＦＤ活動の支援を基本的な役割とし、カリキュラムの開発等を含めた各学部等の授業・教育改善を全学的に共有する場とする。

なお、機動的な会議体の運用ができるよう平成25年度から新たなＦＤ委員会が組織できるよう構成員の数を再考することとし、各学部等主体のＦＤ活動が十分に確立された後は、再度、ＦＤ委員会の役割を見直す。

上記の経緯を経て新発足した平成25年度ＦＤ委員会は、次のように従来とは異なる運営を展開してきました。

①　各部局を代表する委員を原則１名とし、委員総数をほぼ半減した。

②　ＦＤフォーラムや授業改善アンケートなどのＦＤ活動は、ＦＤ委員会全体で審議、実行する形に改められた。従来は、個々の活動を担当するプロジェクトチームを決め、各プロジェクトチームが企画・運営の責任を負う形をとっていたため、ＦＤ委員会全体で議論する機会が

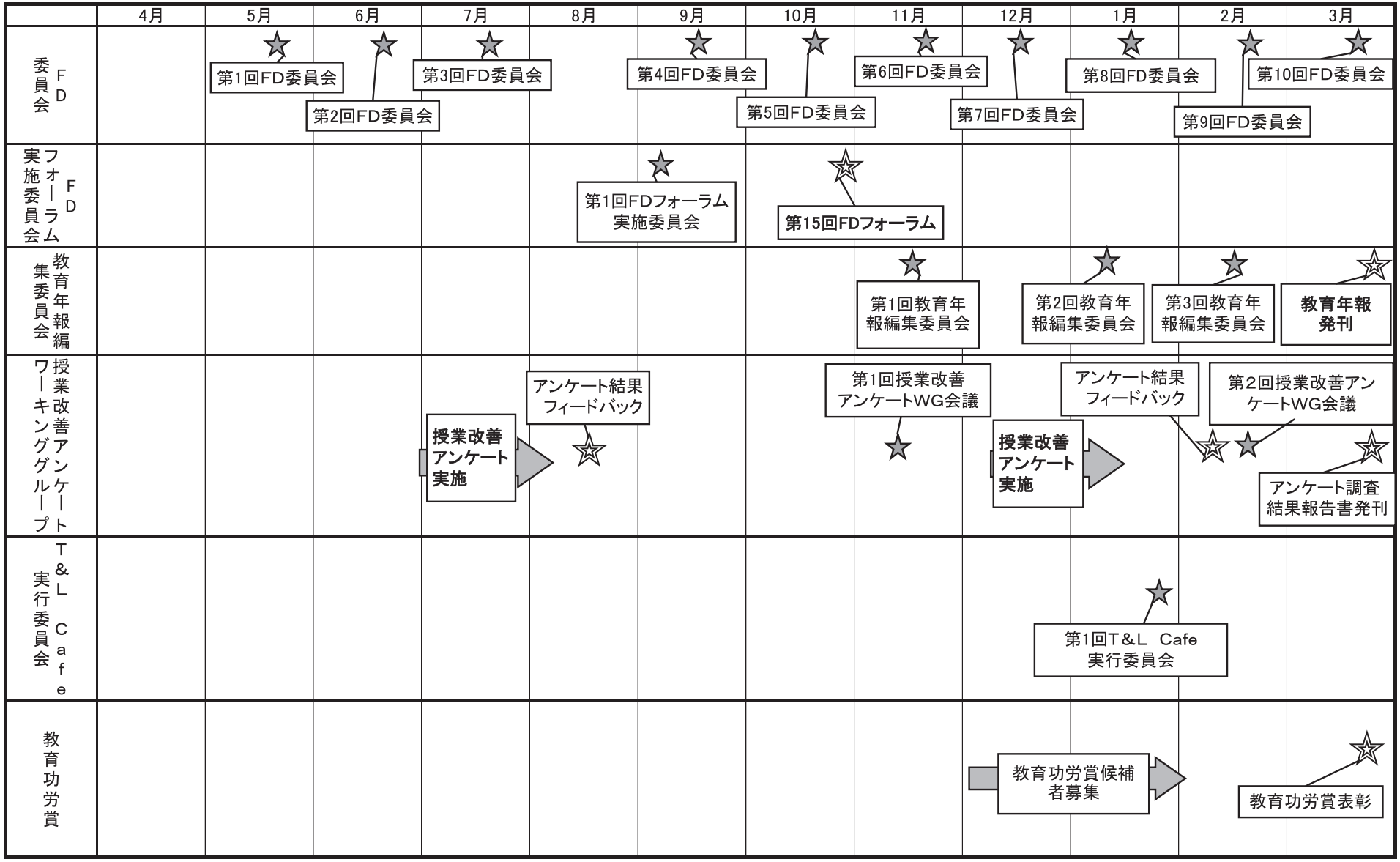
限られていたし、また全学的に各部局の意見を聞きながら進めることが困難であった。

③　上記のような運営を行うため、ＦＤ委員会はほぼ毎月１回の開催となり、定例化されてきた。その結果、ＦＤ委員会が、ＦＤ委員を通じて各部局と日常的に意見交換できるようになった。

平成25年度のＦＤ活動は、上記のように従来とは一線を画する形で展開してきました。とはいえ新体制は当初から細部まで設計されていたわけではありません。実際の運営は、まさに「走りながら考える」状況で進んできました。したがって個々のＦＤ活動については不十分な点が多々見られたことだと思います。皆さんの忌憚のないご意見を歓迎する次第です。

２．平成25年度 FD 活動一覧

平成25年度　FD活動スケジュール一覧



平成25年度　FD 活動一覧

1．第15回 FD フォーラム

日　　時：平成25年10月30日　13：30 ～ 16：30
テ ー マ：いかにして学生の主体的な学習の場をつくるか
参加者数：84名
プログラム：
【第１部】
１）「教育と共育について」 FD 委員会　委員長　森川　章
２）薬学部　事例紹介「大学活性化を目的とした学生フォーラム」
　　話題提供：薬学部　大津史子准教授、学生（薬学部）

【第２部】
１）経済学部　事例紹介「ゼミナールレポートフェスティバル」
　　話題提供：経済学部　渋井康弘教授、学生（経済学部）
２）全学意見交換会

2．平成25年度前・後期授業改善アンケート

実施期間：前期…平成25年７月２日～平成25年７月20日
　　後期…平成25年12月17日～平成26年１月10日
対象科目：
　学部の授業を担当する専任教員および非常勤講師を対象とし、専門科目を中心に、前期は最も履修者が多い講義科目、後期は平成24年度後期にアンケートを実施した講義科目において実施した（ただし、体育科目、オムニバス形式の科目、実験・実習・演習科目、履修者数が10名未満の科目は除く）。
　実施科目数は前期740科目（学生回答数：延べ　53,379件）
　　後期638科目（学生回答数：延べ　37,841件）

概　　要：
　学生の授業に対する意見を把握し、改善点・要望事項を把握するとともに、調査結果を今後の授業改善の一助とするために実施した。
　集計結果は教員個人にフィードバックし、授業改善に必要な情報として活用している。また、学部単位における FD 活動を推進することを旨に、強みと弱みを明確にした分析結果を報告書として取り纏め、全教員に配布し、授業改善の素材として活用している。

3．名城大学教育年報第８号発刊

発 刊 日：平成26年３月
発行部数：730部
概　　要：
　本学における教育活動の研究・実践活動を共有・蓄積し、広く教育の質の向上に資することを目的として、教育力の向上に資する研究または取り組みについての教育研究論文・教育実践

報告を募集した。

全教員および各部局に配布し、他大学にも送付した。

教育年報の種別・内容等は次のとおりである。

	教育研究論文	教育実践報告
定　　義	教育理論又は教育実践を対象とする学術的な手続きを踏まえた研究論文	教育実践を対象とした取り組みで、本学および他の大学の学部・研究科・センター・部署の参考になるような報告
投稿資格	名城大学の教職員（教員・事務職員）。本大学の教育に携わる他大学等の教育職員（非常勤講師）の投稿も可。	

第８号では、教育研究論文については４論文の投稿があり、査読審査を経て、３論文を掲載。教育実践報告については内容の確認を経て、２報告を掲載した。

４．平成25年度 FD 活動報告書発刊

発 刊 日：平成26年３月

発行部数：730部

概　　要：

平成25年度の本学における FD 活動をまとめたもので、FD 委員会の活動報告や第15回 FD フォーラムの報告を掲載した。全教員および各部局に配布し、他大学にも送付した。

５．教育功労賞表彰

概　　要：

職員の教育改善に対する意識を高め、組織の活性化を図り、本学の教育の質の向上に資することを目的とし、各学部及び研究科等において、教育活動及び教育改善に大きく貢献した専任教員またはグループ（事務職員を含む）を表彰するため、候補者を募集した。

今年度は、計６件の申請があり、ＦＤ委員会による審査及び大学協議会の議を経て、６件を表彰した。（学長表彰は、平成26年4月予定）

6．学外セミナー・研究集会等への派遣

【大学教育開発センターの予算執行分のみ掲載】

No.	開催日時	主催機関	企画名称	派遣人数
1	6月1日～ 2日	大学教育学会	大学教育学会第35回大会「教育から学習への転換」	3名
2	6月15日	全国私立大学 FD 連携フォーラム	2013年度総会（パネルディスカッション）	1名
3	7月6日	㈱ベネッセコーポレーション 大学事業部	Benesse 大学シンポジウム2013　「学生が成長する教学改革」	1名
4	7月30日	同志社大学学習支援・教育開発センター	2013年度　同志社大学　学習支援・教育開発センターＦＤ講演会	1名
5	8月9日	大学改革フォーラム実行委員会	大学改革フォーラム　2013	2名
6	9月12日～14日	初年次教育学会	初年次教育学会第6回大会	1名
7	10月4日～ 6日	愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室	ファカルティ・ディベロッパーＳＤコーディネーター養成講座	2名
8	10月7日	株式会社ベネッセコーポレーション　大学事業部	Benesse 大学シンポジウム2013 「学生が大学の授業で身につけるべき力とは」	3名
9	11月22日	立命館大学	第7回 教学実践フォーラム	1名
10	11月30日～12月1日	大学教育学会	大学教育学会2013年度課題研究集会	1名
11	11月28日	Future Skills Project 研究会	産学協同就業力育成シンポジウム2013	1名
12	11月28日	学校法人追手門学院 法人事務局総務課	追手門学院大学創立50周年記念講演会	1名
13	12月7日	法政大学　教育開発支援機構 FD 推進センター	ＦＤフォーラム「わかりやすいＦＤについて考える」	1名
14	12月10日	国立教育政策研究所	国立教育政策研究所 平成25年度 教育改革国際シンポジウム	1名
15	1月25日	大学コンソーシアム京都	2013年度第3回京都 Fder 塾	1名
16	2月7日	大学評価・学位授与機構	自己評価を高めるための目的・計画と指標の作り方に関する研修会－ステップ3－	1名
17	2月21日～22日	山形大学エンロールメント・マネジメント部　政策課	第5回 EMIR 勉強会	1名
18	2月22日～23日	大学コンソーシアム京都	第19回 FD フォーラム	4名
19	3月18日～19日	京都大学高等教育研究開発推進センター	第20回大学教育研究フォーラム	1名

３．平成25年度 FD 委員会

平成25年度　FD委員会委員

所属等	職　名	氏　名
副学長	委員長	森川　章
大学教育開発センター	副委員長・教授	宮嶋　秀光
学務センター	センター長	渋井　康弘
法学部	教授	前田　智彦
経営学部	教授	鳥居　弘志
経済学部	准教授	伊藤　健司
理工学部	教授	山中　三四郎
農学部	教授	日野　輝明
薬学部	准教授	大津　史子
都市情報学部	教授	小池　聡
人間学部	教授	岡戸　浩子
総合学術研究科	助教	神藤　定生
法務研究科	教授	村田　裕
大学・学校づくり研究科	准教授	中島　英博
教職センター	教授	酒井　博世
大学教育開発センター	事務部長	大武　貞光
学務センター	事務部長	大脇　肇
キャリアセンター	事務部長	上村　克義

平成25年度　ＦＤ活動WG委員名簿

【ＦＤフォーラム実施委員会】

No.	氏　　名	所　属　等
1	森川　章	副学長、ＦＤ委員会委員長
2	宮嶋　秀光	大学教育開発センター長
3	渋井　康弘	学務センター長
4	前田　智彦	法学部教授
5	日野　輝明	農学部教授
6	大津　史子	薬学部准教授

【授業改善アンケートワーキンググループ】

No.	氏　　名	所　属　等
1	森川　章	副学長、ＦＤ委員会委員長、経営学部教授
2	宮嶋　秀光	大学教育開発センター長、人間学部教授
3	鳥居　弘志	経営学部教授
4	大津　史子	薬学部准教授
5	中島　英博	大学・学校づくり研究科准教授
6	大脇　肇	学務センター事務部長

【教育年報編集委員会】

No.	氏　　名	所　属　等
1	伊藤　健司	経済学部准教授
2	山中　三四郎	理工学部教授
3	神藤　定生	総合学術研究科助教
4	宮嶋　秀光	大学教育開発センター長、人間学部教授

【Ｔ＆Ｌ café 実行委員会】

No.	氏　　名	所　属　等
1	岡戸　浩子	人間学部教授
2	小池　聡	都市情報学部教授
3	村田　裕	法務研究科教授
4	上村　克義	キャリアセンター事務部長

【ＦＤ委員会事務局】

No.	氏　　名	所　属　等
1	酒井　博世	教職センター長
2	大津　史子	薬学部准教授
3	中島　英博	大学・学校づくり研究科准教授

平成25年度　FD委員会活動記録

第１回　平成25年５月10日（金）

【審議事項】

１．平成25年度 FD 委員会の運営方針について

２．平成25年度授業改善アンケートの実施について

【報告事項】

１．平成25年度 FD 委員会の開催日程について

第２回　平成25年６月７日（金）

【審議事項】

１．平成25年度 FD 委員会の運営方針について（継続）

　１）FD 委員会委員の任務について

　２）各 FD 活動の内容について

２．平成25年度授業改善アンケートの実施について（継続）

３．平成25年度第15回 FD フォーラムに向けて

４．教育学術新聞企画「教授法が大学を変える（第２回）」について

第３回　平成25年７月19日（金）

【審議事項】

１．平成25年度授業改善アンケート・フィードバック様式について

２．第15回 FD フォーラムについて

３．教育年報について

４．学部・研究科主体の FD 取組に掛かる予算措置について

【報告事項】

１．「教授法が大学を変える」への応募状況について

２．全国私立大学 FD 連携フォーラムの参加について

３．平成25年度 FD 委員会開催日程について（追加）

第４回　平成25年９月６日（金）

【審議事項】

１．第15回 FD フォーラム企画について

２．授業改善アンケート実施報告について

【報告事項】

１．ファカルティ・ディベロッパー養成講座 in 京都について

第５回　平成25年10月18日（金）

【審議事項】

１．授業改善アンケートの修正対応について

２．授業改善アンケートワーキンググループの編成について

３．第15回 FD フォーラム実施に係る意見集約について

４．平成25年度前期の学部・研究科等における FD 活動状況報告について

【報告事項】

１．2013年度大学教育学会課題研究集会について

２．平成25年度「私立大学等改革総合支援事業」の申請後の課題について

第６回　平成25年11月15日（金）

【審議事項】

１．平成25年度 FD 活動の進め方（WG の設置等）について

２．後期授業改善アンケートの実施について

３．教育年報の編集について

４．平成25年度教育功労賞について

【報告事項】

１．第15回 FD フォーラム実施報告について

２．平成25年度「私立大学等改革総合支援事業」選定状況について

３．FDer 養成講座 in 京都出張報告について

４．平成25年度教務部課長相当者研修会出張報告について

第７回　平成25年12月13日（金）

【審議事項】

１．平成25年度教育功労賞について（継続）

　１）推薦書様式の確認

　２）表彰者数について

　３）審査の実施方法について

　４）特別教育功労賞の審査基準について

　５）成果の公表方法について

【報告事項】

１．平成25年度後期授業改善アンケートの実施について

２．大学コンソーシアム京都 FD フォーラムの開催について

３．法政大学 FD フォーラム出張報告

４．FDer 養成講座 in 京都出張報告について

５．平成25年度教務部課長相当者研修会出張報告について

第８回　平成26年1月17日（金）

【審議事項】

１．平成26年度授業改善アンケート実施に向けた検討について

２．平成25年度 FD 活動刊行物について

３．平成25年度 T&L　Café 企画に係る意見聴取について

【報告事項】

１．教育年報編集委員会の進捗について

２．教育功労賞募集の進捗について

３．セミナーの案内について

第９回　平成26年2月14日（金）

【審議事項】

１．平成25年度教育功労賞の審査について

２．平成25年度授業改善アンケート全体報告書について

３．平成26年度 FD 委員会開催日程について

【報告事項】

１．T&L Café 実行委員会の検討状況について

２．「2013年度 第3回京都 FDer 塾」出張報告

第10回　平成26年3月14日（金）

【審議事項】

１．平成25年度教育功労賞の審査について

【報告事項】

１．平成25年度ＦＤ活動報告について

２．大学行政管理学会中部・北陸地区研究会報告

３．退学防止に向けた取り組みについて

４．GPA 制度を用いた学習指導の検討について

４．平成25年度
各学部のＦＤ推進組織活動報告

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　法学部　　）
推進組織名（　　ＦＤ部会　　）

1．平成25年度の活動報告

法学部における取組組織である FD 部会の活動は、法学研究科に１年遅れて平成25年度からスタートした。活動方針としては、いわゆるゼミ論文の質の向上を目的に、専門科目の教員がほぼ全員担当する演習科目（専門演習、卒業研究演習）について、指導経験を各教員から報告し暗黙知の共有を図ることとなっている。その目標は、ゼミ論文が法学部における教育の集大成というべき位置にあることから、その指導上の経験・感想を報告し合うことで、学部教育の現状と課題について共有化や議論を図ることにある。

平成26年２月26日の教授会の際に FD 部会を併催し、教務委員からの話題提供を受けて、各教員からゼミ論文の指導にあたっての経験・感想を報告し合い、情報共有を図った。

なお、FD 部会としての活動ではないが、平成25年度中はカリキュラムの改変に向けて、通常の教授会の場で、学部教育のあり方について議論がなされ、特に演習科目については各教員の経験や他校における調査に基づき、演習科目の学年･学期の配置、設置趣旨、演習科目間の連携といった様々な論点について活発に議論が行われたことを付記したい。

2．今後の課題、方向性

FD 部会の活動は緒に就いたばかりであり、今後も継続的な活動を期したい。

上述のように、FD 部会の活動方針としては、ゼミ論文の指導についての情報共有を第一とするが、そこの活動を重ねることで、学部教育全体を通じての課題の認識、共有につなげることを期したい。

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成26年２月26日	ゼミ論文の指導について

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　法学研究科　　）
推進組織名（　　ＦＤ部会　　）

1．平成25年度の活動報告

法学研究科における取組組織である FD 部会は、前年度（平成24年度）から活動を開始した。

平成25年２月26日の研究科委員会で修士論文審査結果の報告が行われた機会を捉え、FD 部会を併催して修士論文提出者それぞれの指導教員から、修士論文を指導するにあたっての指導方針や工夫点について報告がなされた。修士論文そのものの内容等に関する指導内容のみならず、それぞれの学生の進学時の学力や立場（社会人院生等）を踏まえて、修士論文執筆に向けて、基礎固め等のためどのような指導を行ったかに踏み込んだ報告がなされ、出席の教職員の間で知識が共有された。

平成25年度においても、論文執筆に向けた指導が大学院教育の肝要であるとの認識にもとづき、修了予定者の論文指導をどのように行ってきたか情報共有と議論を図る方針をとっている。

平成26年２月26日の研究科委員会の機会を捉えて、FD 部会を開催し、修了予定者の指導教官から、それぞれの学生の人となりや目標を踏まえての課程在籍中の指導方針、論文の概要と指導上、苦労や工夫のあった点などが報告された。

2．今後の課題、方向性

平成26年度においても、論文執筆に向け、過程在籍中を通じて学生に行う指導が大学院教育の肝要であり、論文指導に関するノウハウ、考え方についての情報共有、意見交換が法学研究科における FD 活動にふさわしいとの方針には変わりがなく、論文審査結果報告の機会を捉えた FD 部会の開催というこれまでの活動を継続する。

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成26年２月26日	修士論文の指導について

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　経営学部　　）
推進組織名（　　教育制度改革委員会　　）

1．平成25年度の活動報告

活動目標・・・学部の教育改善・充実を図る。

具体的に、入学から卒業までの学生の成長状況をチェックし、問題の把握・分析・解決に努め、創造的な知性と豊かな人間性を備えた有能な人材の育成を目指した魅力ある経営学部の構築を目指す。

活動内容及び実績等については下記活動記録参照。

特に、平成24年度自己点検・評価作成、卒業論文の基本的考え方、新カリキュラム編成及び学則改正に多くの時間を費やして十分議論し、教育改善・充実を図ることができた。

◎教育制度改革委員会メンバー

経営学部長、大学協議員、経営学科長、国際経営学科長、大学院主任教授、教務委員長、 FD 委員長、キャリアセンター委員長

2．今後の課題、方向性

次年度も従来から設置されてきた教育制度改革委員会を、FD を推進する組織と捉え、FD 活動を進める。

日常的な FD 会議として、構成員全体が参加する教授会の前後に教育改善のための議論の場を設定して、経営学部を取り巻く環境分析、これまでの教育改善活動やカリキュラム編成を検討する。

◎教育制度改革委員会・・・前後期各 2 回を目安に開催

◎日常的な FD 会議・・・・必要に応じて教授会の前後で開催

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年 4 月11日	自己点検・評価作成について①
2	平成25年 4 月25日	卒業論文について①
3	平成25年 5 月16日	自己点検・評価作成について②、卒業論文について②
4	平成25年 6 月13日	自己点検・評価作成について③
5	平成25年 6 月27日	自己点検・評価作成について④
6	平成25年 7 月11日	カリキュラム改正について①
7	平成25年 9 月26日	自己点検・評価作成について⑤、カリキュラム改正について②
8	平成25年11月14日	カリキュラム改正について③
9	平成25年11月21日	カリキュラム改正について④
10	平成25年11月28日	カリキュラム改正について⑤
11	平成26年 1 月 9 日	学則改正について

※教育制度改革委員会、日常的な FD 会議以外に教授会で議論したものも含む。

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　経営学研究科　　）
推進組織名（　　教育制度改革委員会　　）

1．平成25年度の活動報告

活動目標・・・研究科の教育改善・充実を図る。

具体的に、入学から修了までの院生の成長状況をチェックし、問題の把握・分析・解決に努め、創造的な知性と豊かな人間性を備えた有能な人材の育成を目指した経営学研究科の改革を目指す。

併せて、学部と大学院との接続プロジェクトを検討する。

活動内容及び実績等については下記活動記録参照。

特に、平成24年度自己点検・評価報告書作成、修士・博士論文の基本的考え方、入試制度の見直し及び収容定員の見直しに多くの時間を費やして十分議論し、教育改善・充実を図ることができた。

◎教育制度改革委員会メンバー

研究科長、大学院主任教授、大学協議員、経営学科長、国際経営学科長、教務委員長、FD 委員長、キャリアセンター委員長

2．今後の課題、方向性

次年度も従来から設置されてきた教育制度改革委員会を、FD を推進する組織と捉え、FD 活動を進める。

日常的な FD 会議として、構成員全体が参加する教授会の前後に教育改善のための議論の場を設定して、経営学部を取り巻く環境分析、これまでの教育改善活動やカリキュラム編成等を検討する。

◎教育制度改革委員会・・・前後期各２回を目安に開催

◎日常的な FD 会議・・・・必要に応じて教授会の前後で開催

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年５月16日	自己点検・評価報告書作成について①
2	平成25年６月27日	自己点検・評価報告書作成について②
3	平成25年９月12日	自己点検・評価報告書作成について③
4	平成25年９月26日	収容定員の見直し、修士・博士論文の基本的考え方
5	平成26年２月13日	2015年度入試制度について①
6	平成26年２月19日	2015年度入試制度について②

※教育制度改革委員会、日常的な FD 会議以外に研究科委員会で議論したものも含む。

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　経済学部　　）
推進組織名（　　経済学部 FD 委員会　　）

1．平成25年度の活動報告

経済学部では、活動目標を「各教員が個人的に培ってきた教育に関するノウハウや経験を、学部内の教員全体で共有し、学部教育の改善・充実を図る。」としている。

推進組織として経済学部 FD 委員会を組織した。構成メンバーは、学部長、学科長（２名）、学科委員（２名）、教務委員から２名の６名（兼任あり）である。なお、教職員全体での取り組みを進めるため学部 FD 委員会には事務長も参加している。

平成25年５月の教授会で、今年度の具体的取り組み内容の主なものとして、①従来から行っている活動の FD としての捉え直し、②学部 FD 懇談会の開催を確認した。

まず、①従来から行っている活動の FD としての捉え直しについては、授業に関するものと、授業以外のものがある。授業に関するものは、主にフィールドワーク関連のものであり、授業以外のものは新入生セミナー、デイハイク、ゼミナール・レポート・フェスティバルなどに関するものである。

フィールドワークについては、フィールドワークをさらに充実させる取り組みとして、学内の教育の質保証プロジェクト（学内 GP）の取り組みを行っている。また、平成25年10月と平成26年２月にフィールドワーク担当者委員会を開催し、実務的な調整などのほか、開講状況と履修申し込みの状況、開講に関する課題、学生の取り組み状況などについて意見交換し検討した。

授業以外の取り組みについては、新入生の受け入れやゼミナールの活性化のために、学部で検討して実施するようになった取り組みについて、FD 活動として改めて捉え直すものである。それぞれの取り組みは既におおよそ年間スケジュールに組み込まれて各担当者を中心に進められる状況になっている。その中で常に課題を把握し次回への改善に取り組んでいるが、活動記録として記録することで、その時点での課題や次回に向けての方向性などを当該年度の担当委員以外にも情報共有のための資料となりうる。しかし、この点は学部 FD 委員会として十分な周知ができていなかった。後述のように次年度への課題としたい。

次に、②学部 FD 懇談会は、学部教育に関する諸問題を教員同士で話し合うものである。会議としてよりも懇談会としてフリーディスカッションを行う中でノウハウの共有を図ろうとするものである。当初の予定では、前期後期各２回を目安に実施する予定であったが、今年度については２月と３月の２回の開催となった。なお、経済学部と経済学研究科の教員はほぼ同じであるため、これらの FD 懇談会は、現在までのところ合同開催としている。

○第１回経済学部 FD 懇談会（経済学研究科 FD 懇談会と合同開催）

日時：平成26年２月26日（木）　13時～ 14時

会場：共通講義棟北 N-234

テーマ：ゼミナール（基礎ゼミ、専門ゼミ）における学生の主体的取り組み・発言

第１回のFD懇談会は、「ゼミナールにおける学生の主体的取り組み・発言」をテーマとして、話題提供のあと、フリーディスカッションをおこなった。このテーマは、今年度の全学のFDフォーラムのテーマにも関連するものである。

○第２回経済学部FD懇談会（経済学研究科FD懇談会と合同開催）

日時：平成26年３月13日（木）　13時～14時（予定）

会場：共通講義棟北N-234

テーマ①：学内GPの取り組み、フィールドワークの取り組み

テーマ②：大学院生研究発表会について

第２回のFD懇談会は「学内GPの取り組み、フィールドワークの取り組み」をテーマとして開催予定である。経済学部では、平成24年度から学内GPとして「フィールドワーク教育の充実・多様化のためのパッケージ開発」をテーマとして取り組んでいる。主に国際フィールドワークと社会フィールドワークを対象とした取り組みであるが、フィールドワーク担当者以外の教員も含めて学部全体として意見交換する場としてテーマを設定した。

この他、平成25年10月30日に全学で開催された第15回FDフォーラム「いかにして学生の主体的な学習の場をつくるか」では、事例紹介として経済学部ゼミナール・レポート・フェスティバルについて、渋井教授と学生２名による報告がなされた。報告後の全学意見交換会にもパネラーとして参加した。FDフォーラムについては、学部教員・職員も参加した。

２．今後の課題、方向性

FD推進組織の課題としては、常設委員会としての学部FD委員会は初めてのものであり、計画的に十分には取り組みを集約・実施できない面があった。各委員会における活動記録の作成について十分な周知ができていない面があった。

FD活動としての方向性としては、まずは平成25年度の取り組み内容を継続して実施していく。実施にあたっては、定例的な学部FD委員会を開催して、継続的な取り組みを進めていく必要がある。また、各委員会や学部行事の実行委員会がFDに関連する活動を行った際に、教授会にて報告することにより課題や改善点を共通できるようにしていく。

３．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成26年１月23日	平成25年度３月までの取り組みについて
2	平成26年２月19日	平成25年度活動報告について 平成26年度の取り組みについて

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　経済学研究科　　）
推進組織名（　経済学研究科 FD 委員会　）

1．平成25年度の活動報告

経済学研究科では、活動目標を「各教員が個人的に培ってきた教育に関するノウハウや経験を、大学院担当教員全体で共有し、大学院教育の改善を図る。」としている。

推進組織として経済学研究科 FD 委員会を組織した。構成メンバーは、研究科長、主任教授、研究科委員（３名）の５名である。なお、教職員全体での取り組みを進めるため研究科 FD 委員会には事務長も参加している。経済学部の項目でも示したように、経済学研究科と経済学部の教員はほぼ同じであるため、学部・研究科 FD 委員会や学部・研究科 FD 懇談会は、現段階では合同開催としている。

平成25年５月の研究科委員会で、今年度の具体的取り組み内容の主なものとして、①従来から行っている活動の FD としての捉え直し、②研究科 FD 懇談会の開催を確認した。

まず、①従来から行っている活動の FD としての捉え直しについては、オリエンテーション、大学院生研究発表会、教員と大学院生交流会などを FD として捉え直すものである。

経済学研究科では、数年前から６月に大学院生の研究発表会と教員と大学院生交流会を実施している。修士課程２年生が、研究計画に基づく学修・研究成果、現在の研究の進捗状況、論文作成計画について発表するもので、経済学研究科の教員と大学院生が参加する。専門分野をこえて指導教員以外の教員・大学院生も含めての議論・交流が行われる。今年度は平成25年６月に実施した。発表会終了後、７月に実施形式などについて改善点などを把握するための教員アンケートを実施した。また、後述の第２回 FD 懇談会のテーマのひとつとして設定し、意見交換する予定である（平成26年３月実施予定）。

次に、②研究科 FD 懇談会は、学部 FD 懇談会と同様に、大学院教育に関する諸問題を教員同士で話し合うものである。会議としてよりも懇談会としてフリーディスカッションを行う中でノウハウの共有を図ろうとするものである。当初の予定では、前期後期各２回を目安に実施する予定であったが、今年度については２月と３月の２回の開催となった。学部 FD 懇談会と合同開催で、第１回は学部のゼミをテーマとして行った。第２回の FD 懇談会のテーマのひとつとして「大学院生研究発表会について」を予定している。

○第２回経済学研究科 FD 懇談会（経済学部 FD 懇談会と合同開催）

日時：平成26年３月13日（木）　13時～14時（予定）

会場：共通講義棟北 N-234

テーマ①：学内 GP の取り組み、フィールドワークの取り組み

テーマ②：大学院生研究発表会について

2．今後の課題、方向性

FD 推進組織の課題としては、これも経済学部 FD 委員会と同様となるが、常設委員会としての研究科 FD 委員会は初めてのものであり、計画的に十分には取り組みを集約・実施できない面があった。次年度に向けての方向性としては、平成25年度の取り組みを継続して、その内容を計画的に実施していく。

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成26年１月23日	平成25年度３月までの取り組みについて
2	平成26年２月19日	平成25年度活動報告について 平成26年度の取り組みについて

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　理工学部・理工学研究科　）
推進組織名（　教育改善委員会　）

1.　平成25年度の活動報告

平成25年度は２学科新設による学部再編の一環にあたる新カリキュラム稼働の年度でもあり、この再編を見据えて、教育改善に係る事案について、平成23年度、24年度中に整備した新制度を実践する年でもあった。

まず、初年次における数学教育では、専門教育への橋渡しとして重要な科目であることを踏まえ、初年次で躓く学生を少しでも防ぐために、従来の再試験制度の見直しや新たに補履修制度を導入した。その結果、期末試験成績発表後の早い時期に再試験に向けて、再び勉強する機会を得たことにより、従来であれば、翌期に単位修得を持ち越していた学生の比率を下げることができた。

また、予てより英語教育へ出されていた要望に応え、TOEIC の受験対策を念頭にした英語基礎演習クラスを設置し、ガイダンスやオリエンテーションでその旨の周知を行った。さらに入学後の円滑な学生生活が送れるための方策として、12月に附属高校特別推薦合格者への入学前指導や MEC プログラムへの対応等、入学前教育の重要性を踏まえ、積極的に取り組んでいる。その他、教務委員会と連携し、理工学基礎科目（数学、物理学）におけるクラス分け人数の定数についての議論も行っている。

そして、平成25年度は隔年開催としている「理工学教育推進フォーラム」の開催年にあたり、今回は「理工学部教育の充実を目指した取り組み」と題し、教育の質保証プロジェクトに係り、学部（理工学ナビゲーションシステム、PASTEL）あるいは各学科（情報工学科、応用化学科、メカトロニクス工学科）で推進している様々な取り組みについて、その代表者からの事例報告を受け、次年度以降の理工学部の教育のさらなる充実に向けて、意見交換の場を11月に提供している。

2.　今後の課題、方向性

新カリキュラム稼働の２年目にあたり、その経年進行に伴い、今後も様々な課題が出てくるであろうことを踏まえ、平成25年度理工学部再編の完成年度に向けて、その都度、本委員会で議論を行い、対応を図っていきたい。

旧理工学教育推進センター委員会発足当時から継続している数学教育への対応（数学相談室、数学基礎知識習熟度自己診断テスト）や基礎演習科目（数学･物理学･化学･英語）の履修推奨等、学生の初年次教育から専門教育への円滑な移行に向けた取り組みをさらに推進したい。その他、昨年度より、全学的に取り組みが求められている退学者数削減に向けての対応についても、教務委員会や各学科等と連携を取りながら、理工学部として、最善の方策を検討していきたい。それには WEB を用いた学生指導等支援システムの充実も合わせて、進める必要がある。

そして、理工学部のFD活動のひとつでもある「理工学教育推進フォーラム」は隔年開催としていたが、平成26年度中にも理工学部の構成員が一堂に会し、教育改善に関わる議論を行う機会の提供を設けることも検討する必要がある。そのためには学外で開催されている各種フォーラム等への参加により、他大学が取り組んでいる教育改善等に関わる情報収集の機会を設けることも検討したい。

3. 活動記録

回	開催日	議　題　等
1	平成25年４月18日	平成25年度委員会の検討事項の確認、委員会内規の制定他
2	平成25年５月16日	基礎演習科目（数学・物理学・化学・英語）の履修登録状況、附属高校入学前教育、物理相談室の運営他
3	平成25年７月４日	前期数学相談室開設、理工学教育推進フォーラム、理工学基礎科目におけるクラス分け人数の定義他
4	平成25年９月19日	前期数学相談室利用状況、前期統一試験（数学・物理学・英語）結果報告、MECプログラム、理工学教育推進フォーラム他
5	平成25年10月17日	理工学教育推進フォーラム、退学者の対策、正課外教育への対応他
	平成25年11月14日	理工学教育推進フォーラム：「理工学部教育の充実を目指した取り組み」を開催
6	平成25年11月14日	新入生オリエンテーション、後期数学相談室開設、退学者の対策他
	平成25年12月14日	附属高校特別推薦候補者入学前指導を実施
7	平成25年12月19日	退学率低下に向けた対策他
8	平成26年２月27日	後期数学相談室利用状況、後期統一試験（数学・物理学・英語）結果報告、平成25年度委員会の振り返り、次年度における検討事項他

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　農学部・農学研究科　　）
推進組織名（　　農学部 FD 委員会　　）

1．平成25年度の活動報告

1．1　活動目標

学生の修学および生活について、学科や各委員会等の会議の時間を利用して教職員間で意見交換を行い、農学部のディプロマ・ポリシーに基づく教育および研究活動の充実を行う。定例で行われている学科会議や農場教員会議等において、教育改善のための意見交換を行う。議題としては、授業満足度調査からの授業内容の検討のほかに、研究活動や実験実習、キャリア教育などの充実も視野に入れ、総合的な教育改善を推進する。そのために、まず学部 FD 委員を中心に現状を分析し、各学科にて改善策を講じ、学務委員会や学部 FD 委員会でそれらをまとめてカリキュラムの検証および検討や同系の講義群の目標の設定を行い、それらを各教員が教育や研究に反映する。学科および農場に共通する案件については学部教授会等の時間を利用するなどして学部全教員で情報交換を行い、教育改善への具体的取組についてのイメージを共有できるようにする。

1．2　活動内容

（1）授業アンケート結果について

FD 委員会において、昨年度の授業アンケート結果報告に基づき、他学部と比較して農学部の特徴としてどのようなことが課題となるかについて検討した。その結果は、次の通りであった：①学力程度が低いと感じている学生の割合が高く、そのような学生の授業満足度が低い；②教員は授業のレベルを学力程度の高い学生に合わせて行っている割合が高く、そのような学生の授業満足度は高い；③授業の理解度について、学生は理解できていないと考える割合が高いのに対して、教員は理解できていると考える割合が高かった。これらの農学部の特徴に基づいて、学力程度に違いのある学生に対して、教員はどのレベルに合わせて授業を行うべきかというテーマも含めて、教育改善について各学科会議・農場教員会議で議論してもらうことになった。

各学科会議で出された主要な意見をまとめると、次の通りであった：①基礎科目については中位レベルに合わせるのが適切であるが、発展科目については上位レベルに合わせた講義も必要であり、最先端の内容の講義を行って学生に学問的刺激を与えることが重要である；②学生には日頃から勉強する習慣をつけさせることが必要であり、学力的についてこられない学生については、演習等の科目を別に設けることで基礎学力の底上げをしていく必要がある。授業アンケートの実施方法としては、アンケート結果を学生に還元するためには、5-6 回目に行うのが妥当ではないか、誹謗中傷を防ぎ本音を引き出すために記名したものを担当教員以外が回収することが望ましいのではないかという意見が出された。アンケート結果では、自学学習時間が低いという結果が出ているが、農学部の学生は実験や実習のレポート作成に相当の時間をかけていることから、実験や実習科目についても調査対象としてはほしいという要望が出された。農学部附属農場で実習

については、内容の充実と効率化を図るため、実習についての独自の満足度調査の来年度以降の実施に向けて、調査方法や質問事項について検討を行った。

（２）退学率抑制へ向けた対策

退学者の現状とその数を減らすための対策について、各学科で検討を行った。他大学に比べて退学率が高いとはいえず、その理由として、後援会の活動が活発であり父母懇談会等でのきめ細かな対応あると考えられた。退学の理由としては、約１割の学生が授業についていけずに進級できないか、もしくは他大学受験のために退学していた。その原因として、学生が各学科に抱いていた入学前のイメージと入学後の授業内容のギャップの大きさが考えられた。このギャップを解消していくために、受験者に対するパンフレット等で学科の正確な内容を伝えていくことの大切さが確認され、検討を進めることになった。入学後の学生に対しては、化学の計算やレポートの書き方などの基礎的な部分について演習の科目を設けるなどして、基礎学力の底上げを図っていく必要性が確認され、その方向で検討していくことになった。

２．今後の課題、方向性

授業アンケート結果については、引き続き FD 委員会で分析し、学科会議での議論を通して、学生の理解度を向上させるための授業方法について検討を行う。実験実習については、農場実習の満足度調査を実施に向けての検討をさらに進めるとともに、各学科においても学内での授業アンケートでの実施を求めていくことも含めて、具体的な検討を始める。学生の基礎学力の底上げについては、各学科の新カリキュラムの検討と連動させて検討を続けていく。退学者対策については、パンフレットの内容を各学科で検討するほか、退学者と入試のタイプ、在学中の成績の推移などの関連についてより詳細に分析を行い、逐次学生層の変化を分析していくことも検討する。

３．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年４月11日	FD 委員会：活動方針・計画
2	平成25年５月１日	FD 委員会：授業アンケート結果の検討
3	平成25年５月	各学科会議・農場教員会議：教育改善について
4	平成25年10月	各学科会議：退学者対策について
5	平成26年２月21日	FD 委員会：活動報告とりまとめ

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　農学部　　）
推進組織名（農学部カリキュラム検討委員会）

1．平成25年度の活動報告

1．1　本年度の活動までの経緯

農学部は、生物資源の有効利用と安定的な生物生産、生命現象の解明、食品機能と生物機能の応用および生物と人と自然との調和がとれた環境の創出等について教育を行い、人類の生活向上への貢献することを教育理念として掲げている。本委員会は、平成27年度入学生からの適用を目処に、これまでの教育理念と教育目標を踏襲し、幅広い教養、専門的学識、課題解決能力等の他に豊かな人間性を備えた人材養成の実現に向けた、より効果的で効率的な教育カリキュラムの構築を目的として平成24年度から活動を行っている。

平成24年度には、学科別のカリキュラム検討が行われ、６回開催された農学部カリキュラム委員会において学科から提出された意見やカリキュラム案の調整と取り纏めが行われた。その中では、現行のカリキュラムポリシーを維持することが確認され、これを受けて「本学部の教育理念・教育目標に沿った科目設置」、「学部主体の教養教育」、「より一層体系的な科目構成･学年配当」、「学びの動機づけの強化」の４点を柱にカリキュラム改正案の作成を開始した。これら６回の委員会では、今回の改正の重要なポイントである教養教育科目群と、農学部の専門教育部門を構成する共通教育科目群と各学科の専門教育科目群において、科目の新設や廃止、名称変更などの科目構成と配当学年の大筋が決定した。

1．2　本年度の活動

平成25年度には、各学科会議および附属農場教員会議にて、前年度に決定したカリキュラム改正案の大筋についての協議と確認がなされた。これらの取り纏めが行われた本年度第１回目のカリキュラム検討委員会では、学部開講科目の増加に対するカリキュラムのスリム化についての検討と、各学科での教養教育と専門教育カリキュラムに対する協議と確認についての報告がなされた。そこでは、農学部の専門教育科目の共通教育科目群として位置づけられ、それぞれ４単位の科目として１年前期に開講されている生物と化学を、各学科で開講される専門教育科目に対して自在に対応できるように、それぞれ２単位の「生物学Ⅰ」「生物学Ⅱ」「化学Ⅰ」「化学Ⅱ」とすることが確認された。ここまでの検討内容は、６月６日に開催された農学部教授会にて中間答申として報告された。教授会では、特に教養教育カリキュラムのスリム化について数点の指摘事項があった。本年度第２回目のカリキュラム検討委員会では、教養教育カリキュラムの名称を総合基礎教育部門とし、中間答申でのスリム化に関する意見をもとに最終調整を行った。また、附属農場に関するカリキュラムについての検討を行い、講義と実習の連携強化と幅広い教育内容の提供のために附属農場に所属する教員も講義を担当する方向でカリキュラム等の調整を進めることが確認された。本年度第３回目のカリキュラム検討委員会では、農学部カリキュラム改正につい

ての答申内容の最終確認が行われた。

１．３　本年度の活動の成果

本委員会で検討されて取りまとめられた内容は、９月12日の農学部教授会において最終答申として協議されて承認を得た。最終答申成案には詳細が記されているが、ここでは概要を抜粋して以下に示した。

総合基礎教育部門では「人文社会」、「自然科学」、「言語コミュニケーション」、「情報技術」、「健康とスポーツ」および「キャリア教育」の科目群が主に１、２年次に開講され、各学科ともこの部門から26単位を修得するものとする。このうち、言語コミュニケーション科目群の英語については、グローバル化社会において的確な意思疎通を行う能力がこれまで以上に求められることから必要単位を現行の６単位から８単位とする。健康とスポーツ科目群では、体力や精神力を含めたバランス感覚を保った教養課程とするために２科目を必修科目とし、その他にも幅広く履修するよういくつかの修得条件を設ける。さらに人生全体を見渡して学び考えるという観点から、学びの動機づけや、将来の生き方を考えさせるきっかけとなる体験学習科目としてキャリア教育科目群に「インターンシップ」と「職業指導論」を設置する。加えて、人文社会科目群には、知的活動の基盤となる普遍的教養を涵養するための「日本語学」を設置すると共に、倫理観に基づき自分の頭で考えて真偽を見抜く能力等を陶冶するために「メディアリテラシー」も設置する。

専門教育部門は、共通教育科目群と専門教育科目群からなり、各学科とも必要単位は98単位である。共通教育科目は、必要単位を現行の10単位以上から８単位以上とし、各学科で同一名称の授業科目を開講する。特に生物学と化学については、専門教育科目を履修するにあたり、多様な入学試験形態で入学した学生の基礎学力の向上を図るため、１年次に開講し、柔軟な講義内容に対応できるようにそれぞれⅠ及びⅡに分けて各２単位とする。また、物理学実験、地学実験を本学部開講科目として授業科目に加える。科学英語は本学部各専門分野の教育に不可欠であることから研究室配属の時期に合わせて３年次に開講する。

各学科とも教育目標達成のために、共通教育科目と専門教育科目を全学年に体系的に配置する。

２．今後の課題、方向性

９月12日の農学部教授会では、最終答申の内容とともに、本答申を農学部学務委員会に引き継ぎ、実施に向けた具体的検討を行うことが承認された。今後は、新カリキュラムの実施に向けて、各科目の内容の検討だけでなく、内容に適した担当教員の選定と配置や、学生の余裕を考慮した時間割の作成などを行い、より良い教育を学生に提供できる体制を整えることが課題となろう。

３．活動記録

回	日　程	主な議題
1	平成25年５月９日	・カリキュラムのスリム化 ・各学科での教養教育カリキュラムの検討結果報告 ・各学科での専門教育カリキュラム検討結果報告
2	平成25年７月４日	・総合基礎教育部門のスリム化 ・附属農場に関するカリキュラムについて
3	平成25年７月11日	・平成27年度農学部カリキュラム改正についての答申内容の最終確認

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　薬学部　　）
推進組織名（　　薬学部 FD 委員会　　）

1．平成25年度の活動報告

1）FD 委員会活動目的

薬学部の教育理念、目標に到達するために、教職員組織で取り組む教育改善をサポートする。

2）FD 委員会活動内容

（1）授業改善アンケートを活用した本質的な授業改善方法の検討・実施

授業改善アンケートを毎年実施しているが、その結果は、個人にフィードバックされてはいるが、実質の改善がみられない場合もある。学部全体として、どのように有効活用し、実質的な授業改善を図るかを検討する。

活動実績：前後期実施全授業科目について授業改善アンケートを実施し、成績や各アンケート項目との関連を解析し、教員個々へフィードバックした。また、後期に関しては、薬学部独自のアンケート形態の検討を行うため、授業実感アンケートを作成し、4科目において実施した。

（2）「教育」の工夫や実践を知る機会の提案、提供

教員は、教育やカリキュラムデザインについて学ぶ機会はほとんど無い状況である。そこで、授業改善に結びつく、カリキュラムデザインを学ぶ機会や研修機会の提案や提供を行う。

活動実績：

① FD 講演会

日時：平成25年12月12日実施

演者：文部科学省高等教育局医学教育課薬学教育専門官　丸岡　充　氏

演題：大学教育の質的転換と薬学教育の充実　－ 6年制薬学教育と薬剤師教育 －

参加者：教員34名（内2名名誉教授1名、他学部教員1名）、職員4名

参加者からは、活発な質問があり、現在のカリキュラム改定の認識を深めることができた。

②研修機会の提案

研修会情報の取得方法のアナウンスを行うと共に、若手教員にむけて、2回研修案内を配信した。また、3回の FD に関する研修会に、FD 委員会からそれぞれ1名、職員1名が参加した。

（3）学生の学びに対する姿勢への組織的なアプローチの検討・実施

学生主体の取り組みのバックアップ体制と個々の学生の学びに対する姿勢へのアプローチを組織的に勧めるためのサポートを行う。

活動実績：

① FD フォーラムにおける発表

大学の FD フォーラムにおいて、6年生学生と FD 委員長が薬学部での学生フォーラムの取り組みについて発表した。他学部の取り組みも含め、情報共有ができたことは、学生にとっ

ても有意義であった。

②学生フォーラム実行委員会のサポート

今年度の実行委員会との懇談を持ち、問題点の抽出と情報共有を行った。次いで、次年度の実行委員会のサポートとして、内容や、講師などについて、アドバイスした。

③国試対策委員会との協働による6年生学生の学びの記録作成

国試対策委員会との協働により、6年生の国家試験対策模擬試験および卒業試験の成績の可視化を行った。これにより、学生個人の弱点の把握、時間経過と学生個人の成長を可視化することができ、個々の学生指導に効果的であった。

（4）系統的、継続的な学びを行うための仕組みやサポート体制の議論・提案

系統的、継続的な学びをサポートする仕組みや体制について、議論、提案を行う。

活動実績：カリキュラムツリーがうまく機能していない現状を指摘し、本来ならつながるはずの学びが、その年々で分断されたり、継続ができていない現状を踏まえ、学生の学びを継続させる仕組み作りの重要性を指摘した。これの改善策を構築すべく、教育の質の保証プロジェクトへ「アウトカム基盤型教育の実現をサポートするIR実践のための基盤システムの構築として応募した［（5）参照］。

（5）Institutional Researchの実施体制の確立

入学から卒業、就職までの成長の記録を一貫して把握するすべがない事によって、場当たり的な解析しかできず、教育上の問題点の抽出やその効果的な対策が立てられていない。そこで、学生の入学から就職までの種々のデータを一括で把握できるデータベースの構築を行い、それを利用して教務、学生、国対、入試、就職対策を支援する。

活動実績：まずは、教務係と連携し、教務データの一元管理から開始した。これらのデータを用い、（1）の授業改善アンケート結果と成績との解析を行った。しかし、この解析は非常に煩雑で、今後の継続を考えると、IRの基盤となるデータ蓄積を組織的に構築する必要が明確となった。そこで、教育の質の保証プロジェクトへ「アウトカム基盤型教育の実現をサポートするIR実践のための基盤システムの構築として応募した。

2．今後の課題、方向性

（1）授業改善アンケートを活用した本質的な授業改善方法の検討・実施

次年度も今年度と同様の解析を行うと共に、薬学部としての本質的な授業改善および学生の学びの継続性を考慮したアンケートの実施を検討する。

（2）「教育」の工夫や実践を知る機会の提案、提供

次年度も今年度と同様に、FD講演会の開催と教員への研修機会の提供を行う。課題としては、研修への実質参加をどのようにして推進するかを検討する必要がある。

（3）学生の学びに対する姿勢への組織的なアプローチの検討・実施

次年度も今年度と同様に、学生フォーラムのサポートを中心として、活動を行う。また、6年生に対しては、今年度と同様に、国試対策委員会との協働による6年生の学びの記録の作成を行う。また、他の学年の学生への学びをサポートするデータについて、検討を行う。

（４）系統的、継続的な学びを行うための仕組みやサポート体制の議論・提案

（５）Institutional Research の実施体制の確立

（４），（５）については、教育の質の保証プロジェクトの推進を行い、組織的なアプローチが実現できる仕組みを構築する。また、（１）および（３）の取り組みが（４）および（５）につながると考えられるため、その実践を念頭においたサポート体制および IR 実施体制の確立を目指す。

３．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年５月12日	１．薬学部 FD 委員会取り組み課題について ２．本部 FD 委員会検討事項について
2	平成25年６月10日	１．本部 FD 委員会報告 ２．薬学部 FD 委員会取り組み課題 特に１）授業改善アンケートを利用した本質的な授業改善方法の検討について
3	平成25年７月３日	１．本部 FD 委員会報告 ２．薬学部 FD 委員会取り組み課題 特に１）授業改善アンケートを利用した本質的な授業改善方法の検討について（継続）
4	平成25年８月27日	１．本部 FD 委員会報告 ２．薬学部 FD 委員会取り組み課題 特に１）授業改善アンケートを利用した本質的な授業改善方法の検討について 解析結果フィードバック様式の検討について
5	平成25年10月８日	１．本部 FD 委員会報告 ２．薬学部 FD 委員会取り組み課題 特に１）授業改善アンケートを利用した本質的な授業改善方法の検討について 解析結果およびフィードバック様式の検討について（継続）
6	平成25年10月29日	１．本部 FD 委員会報告 ２．薬学部 FD 委員会取り組み課題 特に１）授業改善アンケートを利用した本質的な授業改善方法の検討について 後期授業アンケートについて ３）学生の学びに対する姿勢への組織的なアプローチの検討・実施 特に学生フォーラム幹部との意見交換について ４）系統的、継続的な学びを行うための仕組みやサポート体制の議論・提案５）と共に教育の質保証プロジェクトへの応募について ５）IR の実施体制の確立　IR 研修会への参加について
7	平成25年12月17日	１．本部 FD 委員会報告 ２．薬学部 FD 委員会取り組み課題 特に１）授業改善アンケートを利用した本質的な授業改善方法の検討について 後期授業アンケートについて（継続） ２）「教育」の工夫や実践を知る機会の提案・提供　FD フォーラムについて ３）学生の学びに対する姿勢への組織的なアプローチの検討・実施　学生フォーラムについて

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　薬学研究科　　）
推進組織名（ 大学院薬学研究科 FD 委員会 ）

1．平成25年度の活動報告

1）FD 委員会活動目的および任務

（目的）

名城大学大学院学則第19条の２に基づき、薬学研究科の教育内容等の改善を図るため、薬学研究科に FD 委員会を設置する。

FD 委員会は FD 活動を通じて研究科全教員が実効性の高い授業改善を進めるとともに、指導力向上を図る。

2）平成25年度大学院薬学研究科 FD 委員会活動内容

大学院 FD 委員会：５回

大学院 FD ワークショップ：年１回

大学院授業評価アンケート（学生､教員）の実施とアンケート結果のフィードバック：年２回（後期特殊研究分は３月にアンケート調査を実施する予定）

3）FD 委員会活動実績

（1）授業改善アンケートを活用した本質的な授業改善方法の検討・実施

平成24年度特殊研究に関するアンケート結果について

平成24年度特殊研究に関して以下のアンケート結果が得られ、改善策について議論した。

①アンケート結果

〇到達目標について

シラバスに実験内容等を具体的に記入し過ぎたため、複数の指導学生を持っている教員の場合は、すべての学生の研究内容を網羅した目標となっていなかった場合があった。

〇研究に取り組む時間について

社会人学生と一般学生では研究にかける時間に大きな差があることが明らかとなった。

〇研究指導に対する熱意について

社会人学生について、教員側は研究指導時間が十分に確保できていないと感じ、しっかり熱意をもって指導できなかったという評価をしているように思われたが、学生側は少しでも指導を受けられたら熱意があったと評価しているように考えられる結果であった。

〇副指導教員制度について

学生から、あまり活用できていないとの意見が多かった。

②改善策

〇到達目標について

複数の指導学生を持っている教員の場合でも、学生共通の目標となるよう、学生個人の技術・能力を伸ばしていくという観点で到達目標を設定する。

○副指導教員制度について

３か月に１度を目処に副指導教員に研究経過を報告し、指導を仰ぐような体制を検討する。

なお、平成25年度については、前期分の研究経過を把握する目的で、10月末をめどに、副指導教員と指導学生の面談を実施し、文書にて主指導教員にフィードバックした。

平成25年度新規開講科目の授業評価アンケート項目について

平成25年度に開講された「基礎薬学特論」、「海外臨床研修」に関するアンケートについて以下のように対応することとした。

○基礎薬学特論の授業評価について

シラバスに記載されている到達目標には、非薬学系出身者を対象としているが、現状は２名の薬学系出身者が履修しており、来年度以降、薬学系出身学生の履修を求めない方針で進めていきたいと考えているので、今回、授業評価アンケートは実施しなかった。

○海外臨床研修の授業評価について

アンケート項目については、通常の特論科目と授業形態が異なるので、実態が評価できるよう、項目を見直した。

平成25年度開講特論科目の授業評価およびアンケート結果の検証について

平成24年度第４回大学院薬学研究科 FD 委員会において、アンケート結果から確認された下記の４つの問題点が改善されているかを検証するため、昨年度と同容の授業評価アンケートを実施した。

１．調査形式：学生・教員ともにアンケート形式（選択式・記述式併用）

２．調査実施日：

学生－７月27日（土）の最終講義終了後

教員－７月29日（月）にアンケートをメール配信し、一斉休暇前の８月７日（水）までに回答

３．調査目的：特論がシラバスに記載された授業の概要と目的・授業内容に準拠して実施され、到達目標を達成できたかを検証し、次年度のシラバス・授業内容の改善の参考資料とする。

４．調査内容：

学生－①到達目標達成度　②全体の印象　③自分の参加態度　④予習・復習に要した時間　⑤シラバスの活用度　⑥担当教員の熱意　⑦次年度に向けた要望　⑧その他自由筆記

教員－①到達目標達成に対して適切な講義を提供できたか　②全体の印象　③学生の参加態度　④シラバス内容に準拠した授業を実施できたか　⑤シラバスに準拠した成績評価ができたか　⑥熱意をもって授業に臨めたか　⑦次年度に向けた方針等の要望　⑧その他自由筆記

５．集計方法：選択式設問については数値化。記述式設問については意見を羅列

６．フィードバック方法：集計したものをまとめ、紙ベースで学生・教員双方に公開する

７．調査担当者：FD 委員

上記の方法で実施した平成25年度特論科目の授業評価アンケート結果について、教員、学生からの回答結果の一部に、本アンケート調査の目的に合致していないものが見受けられたため、それぞれに対するフィードバック方法も含め、具体的な取扱いについて検討したところ、以下の点が課題としてあげられた。

①それぞれの授業方法の妥当性

②オムニバス形式によるレベルあわせの適切性

③大学院博士課程の授業のあり方

そこで、改めて、各委員に対して、教員・学生から徴収したアンケート回答の原本を配布し、その内容の確認と、教員および学生へのフィードバック方法について検討した結果、教員側には学生からのアンケート結果をそのまま報告し、学生には教員の意見の意図するところを要約した形でフィードバックした。また、このアンケート結果から、大学院講義の実施方法について、教員、学生とも改善すべき点があるとの意見が書かれていたことを、大学院運営委員会で報告し、来年度の講義方法について、各系列で検討することとなった。

なお、アンケートの集計結果は、昨年度分との比較ができるように構成した資料とした。

名古屋大学との交流に係る授業評価方法について

名古屋大学の講義を聴講した薬学研究科学生の授業評価方法および名城大学の講義を聴講した名古屋大学医学系研究科学生への授業評価方法について検討したが、講義の相互開放という実情に鑑み、部分的な評価になる可能性が高いとの観点から、今回、継続性をもって取り組む事業であることから、今回は名古屋大学・名城大学の間で聴講実態調査を実施した。

（２）「教育」の工夫や実践を知る機会の提案、提供

大学院 FD ワークショップの開催

下記のごとく、学部 FD 委員会と合同で FD 講演会を開催した。

日時：平成25年12月12日実施

演者：文部科学省高等教育局医学教育課薬学教育専門官　丸岡　充　氏

演題：大学教育の質的転換と薬学教育の充実　－ ６年制薬学教育と薬剤師教育 －

参加者：教員34名（内２名名誉教授１名、他学部教員１名）、職員４名

参加者からは、活発な質問があり、現在のカリキュラム改定の認識を深めることができた。

２．今後の課題、方向性

（１）授業改善アンケートを活用した本質的な授業改善方法の検討・実施

次年度も今年度と同様の解析を行うと共に、薬学部としての本質的な授業改善および学生の学びの継続性を考慮したアンケートの実施を検討する。特に、平成25年度の前期科目の授業評価アンケート結果について、教員、学生からの回答結果から、①それぞれの授業方法の妥当性、②オ

ムニバス形式によるレベルあわせの適切性、③大学院博士課程の授業のあり方の３点が課題として抽出された。この結果を受け、大学院講義の実施方法について、教員、学生とも改善すべき点があるとの意見があったことを、大学院運営委員会で報告し、来年度の講義方法について、各系列で検討することとした。

平成26年度では、課題となった３点について、どのような改善策が講じられたか、その結果、大学院講義としての質が担保され、かつ学生が満足できる講義が実施できたかについて調査を行う予定である。

また、必要に応じて、大学院講義の在り方について、大学院 FD ワークショップの実施を検討する。

（２）「教育」の工夫や実践を知る機会の提案、提供

次年度も今年度と同様に、FD 講演会の開催と教員への研修機会の提供を行う。

３．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年５月10日	1．平成24年度　特殊研究に関するアンケート結果の検証について 2．平成25年度　大学院薬学研究科 FD 活動について
2	平成25年７月４日	1．平成25年度　授業評価アンケートについて 2．名古屋大学との交流に係る授業評価方法について
3	平成25年12月17日	1．前期授業評価アンケート結果の検証について 2．名古屋大学との交流に係る講義聴講実態調査について
4	平成25年12月25日	1．前期授業評価アンケート結果の検証について（継続）
5	平成26年１月21日	1．前期授業評価アンケート結果の検証について（継続）

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（都市情報学部・都市情報学研究科）
推進組織名（　都市情報学部授業研究会　）

1．平成25年度の活動報告

今年度の活動方針としては、当初は「授業研究会」を開催し教員間で意見交換等を行うことを目標としていたが、「研究会」としての場を設けることはできなかった。しかし、学生の受講状況や講義の状況等については、教務委員会（月１回）において、常に講義での学生の様子や受講状況、運営方法等について議論をし、必要に応じて教授会へ上程し、教授会等で広く聴収、報告して情報交換を行うなど、積極的に情報提供を行った。

また、新入生を対象としたリメディアル教育の一環の「ファンデーションコース」と、正課授業である「教養演習Ⅰ（キャリア形成論）」と「学習力調査」の報告会を教授会前に２回と教務委員を対象に１回の計３回実施した。

報告会では、新入生或いは履修学生の状況と経年変化の報告に加え、今後の展開などの情報を共有した。

2．今後の課題、方向性

次年度については、今年度開催できなかった「研究会」を定期的に開催し、FD に関して学部間で系統的に取り組んでいきたいと考えている。また、各教員で講義やゼミナール運営で工夫している点や改善点、学生の受講状況などについても意見を出し合い積極的に情報交換し、改善につながる場としたい。

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年７月18日 （教務委員）	新入生に係る報告会 ―大学生基礎力調査結果等を踏まえて―
2	平成25年７月25日 （教授会構成員）	新入生に係る報告会 ―大学生基礎力調査結果等を踏まえて―
3	平成25年10月24日 （教授会構成員）	ファンデーションコース実施報告会

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　人間学部　　）
推進組織名（　　人間学部 FD 委員会　　）

1．平成25年度の活動報告

人間学部の教員団の教育・研究を含めた資質・能力向上を活動目標として以下に取り組んだ。

・人間学部 FD 委員会を２月末までに２回開催した。
・オムニバス形式の授業である「人間学総論」を検証の対象として、FD フォーラムを開催し、前体制から現体制に至った経緯を踏まえた上で、現状と今後のあり方に関する意見交換を行った。

2．今後の課題、方向性

人間学部の学生の４年間における学びを支援するための、教育内容および教育環境のさらなる改善に取り組む。そのために、以下の FD 活動を予定している。

・FD 委員会の開催
・FD フォーラムの開催
・留学生に対する意見聴取
　・新入生セミナーの検証

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年10月10日	FD 委員会（FD 委員会の具体的な取り組み内容と企画）
2	平成25年11月21日	FD フォーラム（「人間学総論」に関する意見交換）
3	平成26年2 月12日	FD 委員会（今年度の FD 活動の検証と次年度の取り組み内容について）

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　人間学研究科　　）
推進組織名（　人間学研究科 FD 委員会　）

1．平成25年度の活動報告

「教育内容および教育環境の改善」「教育技法の改善・向上のための具体的活動」「教員の資質開発を測るための組織的な研修」を目標として以下の活動に取り組んだ。

・前期・後期に実施した授業満足度に関するアンケートの結果について意見交換を行った。
・必修共通科目である「コミュニケーション特別演習」の教育内容・指導方法および今後の課題に関する意見交換を行った。

2．今後の課題、方向性

上記の目標に向けて、次年度にも今年度と同様の以下の活動内容に引き続き取り組む予定である。

・学生による授業満足度アンケートの実施および分析
・教育内容、教育技法及びシラバスの改善審議

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	前期	研究科１年生と２年生に対してアンケート調査を行った。
2	後期	研究科１年生と２年生に対してアンケート調査を行った。
3	平成26年２月12日	必修共通科目「コミュニケーション特別演習」に関する意見交換を行った。

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　大学院総合学術研究科　　）
推進組織名（　　教育検討部会　　）

1．平成25年度の活動報告

活動目標

総合学術研究科の教育改善のために、入学から卒業までの学生の学びや成長を一貫して把握しながら構成員全体が議論・実践できるようサポートする。

活動内容

（1）博士後期課程３年次

①研究科委員会において、論文指導委員会報告書に基づき、議論した。

②９月修了予定の１名について、以下のことを行った。

・６/20、研究科委員会において、主査１名、副査３名を選出した。

・８/２、学位論文公聴会を開催し、公聴会終了後、審査委員会において論文審査および最終試験を行った。

・８/24、研究科委員会において、論文審査結果報告書・最終試験結果報告書に基づく議論の後、無記名投票により、学位を授与することを決定した。

③３月修了予定の１名について、以下のことを行った。

・12/26、研究科委員会において、主査１名、副査３名を選出した。

・１/31、学位論文公聴会を開催し、公聴会終了後、審査委員会において論文審査および最終試験を行った。

・２/20、研究科委員会において、論文審査結果報告書・最終試験結果報告書に基づく議論の後、無記名投票により、学位を授与することを決定した。

（2）博士後期課程２年次

・５/25、副指導教員２名を選出した。

・５/25、研究科委員会において、博士論文作成計画書に基づき、議論した。

（3）博士前期課程２年次

・５/25、それぞれ副指導教員２名を選出した。

・５/25、研究科委員会において、論文指導委員会報告書に基づき、議論した。

・12/12、それぞれ主査１名、副査２名を選出した。

・２/４、修士学位論文発表会を開催した。発表会終了後、審査委員会において論文審査を行った。

・２/６、修士論文審査結果報告書に基づく議論の後、学位授与を決定した。

（４）博士前期課程１年次

・５/25、それぞれ副指導教員２名を選出した。

（５）総合コアプログラム

・４/６、春季総合コアプログラムを開催し、教員１名の講演と、博士後期課程３年次２名および博士前期課程２年次５名の中間発表を行った。

・９/21、秋季総合コアプログラムを開催し、教員１名修了生１名の講演と、博士後期課程２年次１名の中間発表を行った。

（６）総合学術特論

①総合学術特論Ⅰ（前期）

・イントロダクションおよび、地球の成り立ち、生命、人類の歴史と発展について探究活動と議論を行った。

・７/11、全教員参加のもとで、学生によるプレゼンテーション、質疑応答を行った。

②総合学術特論Ⅱ（後期）

・イントロダクションおよび、世界の人口と食糧、環境の変化と生物、子どもと家族について探究活動と議論を行った。

・１/16、全教員参加のもとで、学生によるプレゼンテーション、質疑応答を行った。

実績

博士（学術）学位取得者　２名（予定）

修士（学術）学位取得者　４名（予定）

２．今後の課題、方向性

・社会人入学の長期履修者に対する指導やサポートのあり方について、検討が必要である。

・「総合学術特論」をさらに発展させ、PBL（Problem Based Learning）方式による授業の実現を目指す。

・理系と文系の学生の理解度が大きく異なるような特論科目について、十分な教育効果を期待できるよう、学生グループのレベルに合わせて講義内容・方法の工夫・調整に取り組む。

３．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年６月３日	教育内容、論文作成指導について
2	平成25年９月21日	博士後期課程の論文作成指導について
3	平成26年１月16日	博士前期課程の教育内容について

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　法務研究科　　）
推進組織名（　法務研究科 FD 委員会　）

1．平成25年度の活動報告

前・後期の各期において、それぞれ次のことを行った。

・学生による「授業改善アンケート」の実施

また、本年度は、アンケート項目の一部につき、次のような見直しを行った。

（1）「共通到達目標」を意識し、それを達成できる授業を行うことを求める項目の追加（本年度前期から実施）

（2）授業がシラバスに従って展開されたか否かを問う項目の新たな設定（来年度から実施）

・授業参観の実施

・学生からの「授業への要望」（記名または無記名のアンケート）の聴取

・法科大学院協会主催等の研修への参加

・「授業実施報告書」の提出

また、本年度は、この報告書の書式（雛型）の中に、双方的または多方向的授業の達成度を自己判定する部分を追加した。

2．今後の課題、方向性

（1）FD 取組推進組織について

法務研究科内に設けられた FD 委員会で、各期終了時に定期的に開催し、また上記の各事項を含めて必要なときにはその都度、適宜に委員会を開催し、協議している。この方式を、来年度も続けたい。

（2）FD 活動について

本年度、法務研究科は、（公益財団法人）「大学基準協会」の認証評価を受けた。来年度は、この認証評価で指摘された諸点について検討し、改善していくことが課題である。

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年 9 月 4 日	前期に実施した各事項の確認。後期に向けての問題点の把握と検討。
2	平成26年 2 月22日	後期に実施した各事項の確認。本年度の総括と、来年度に向けての方針の検討。

なお、そのほか実施事項等について、適宜にその都度、委員会を開催し、協議している。

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　大学・学校づくり研究科　）
推進組織名（　ＦＤ懇談会　）

1．平成25年度の活動報告

毎月第一火曜日13時の定期月例開催を年間スケジュールに組み込んで、専任教員７名が集まる FD 懇談会を実施してきた。平成25年度は５月から始めて２月現在では全８回を開催した。残る３月も開催予定である。会議の議題は特定のテーマについての議論ではなく、「３．活動記録」に示すように、教育にかかわる月々の話題を参加メンバーが交互に提起し議論するという方針である。このような運営方針にそってこれまで継続してきたが、本年度後半からは「カリキュラム設計・開発」という議題が連続して取りあげられた結果、研究科全体として取り組む「プロジェクト型 FD」のアイデアが持ち上がり、次年度に向けて準備を進めている。

プロジェクト型 FD の具体的な内容は、平成23年度５月から21週間をかけて行なった本研究科の『大学・学校職員力向上』オンライン・セミナーのブラッシュアップである。このオンライン・セミナーは、①教育財務論、②教育戦略論、③教育マネジメント論の１年次３科目をオンライン授業として開発する狙いから始まった。オンラインのプラットフォームは本研究科が独自に管理する Moodle を使い、対象者は広く大学・学校職員から募集した（66名が応募、抽選によって各科目12名ずつを対象者とした）。オンライン授業の実験結果はこれまで個々の担当者が振り返り、保管する体制であったが、次年度以降、研究科教員チームとして共同で再設計し開発を進めるという話し合いがもたれた。

2．今後の課題、方向性

専任７名全員が常時参加するまでにはまだ至ってないが、専属教員４名が中心となって FD 懇話会が続けられてきた点は大事にしたい。これまでを振り返ると、月ごとに議題を随意に決めて運営する FD 懇談会の方針は、定期・定時の開催によって FD 課題を研究科全体で共有するという点ではある程度の効果をもたらしたと考える。今年度に提案されたプロジェクト型 FD の考え方は、そこから一歩踏み込んで、「何かをなすことによって学び、それを個人とチームの力量向上につなげる」というものである。これまでの FD 懇話会の運営方針と違うのは、開発された成果を可視化でき共有化できる点であるので、それが実際の授業にも反映されるという効果も期待できる。

３．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年５月７日	研究科の自己点検報告書原稿の修正、博士課程カリキュラムに関する意見交換、学内向け研修プログラムの開発
2	平成25年６月４日	調査研究指導充実のための院高度化費の使用方法について
3	平成25年７月２日	学内研修セミナーの内容について（カリキュラム・マッピングの方法論）
4	平成25年10月１日	初回の授業における学生との接し方について、カリキュラム・マッピングの方法論について
5	平成25年11月５日	カリキュラム・マッピングの方法論について
6	平成25年12月３日	カリキュラム・マッピングの方法論について
7	平成26年１月７日	オンラインでの科目開発の方向性について
8	平成26年２月４日	教育財務論を事例としたオンライン教材コンテンツの設計方針について
9	平成26年３月４日（予定）	教育戦略論を事例としたオンライン教材コンテンツの設計方針について

FD 取組を推進する組織の活動報告

学部・研究科・センター（　　教職センター　　）
推進組織名（　　教職センター会議　　）

1．平成25年度の活動報告

活動目標：教員志望学生の実践的指導力の向上及び教員採用試験合格者の確保を目標に、教職に関する科目の授業改善に向けた活動を企画し、運営する。

活動方針：

●名城大学教員養成理念とカリキュラム整合性の検証

●各担当授業科目の改善研究（点検と検証、検討）:『教職入門』

⇒免許法施行規則との擦り合わせ

⇒授業担当者間での授業内容擦り合わせ

⇒平成26年度シラバスへの反映

⇒授業公開、授業参観

⇒平成26年度履修者へのアンケート実施、アンケート集計

●授業研究の内容公表と合同研究会開催

⇒方法、発表者の輪番、スケジュール

⇒研究成果のまとめと公表

●その他

⇒学外での研究会等への参加と報告

⇒教員懇談会での意見交換（12月14日開催予定）

活動内容・実績：

◎平成25年度～平成26年度の取組案を検討し、目標を定めて承認を得た。

◎目標に基づいて、現行の名城大学教員養成理念を検証し、手直しした。

◎各学科（教職課程開設）へ「各学科の教員養成理念」作成を依頼した。

◎文部科学省からの通達に基づく授業内容の取扱いについて検討し、具体的取扱いについて承認の上対応した。

◎教職センター懇談会（12/14開催：授業担当教員による意見交換会）において授業運営上の課題、教員志望学生への指導上の課題等について、意見交換した。

◎教職センター懇談会における意見交換について、次年度に向けて課題とする内容を取りまとめて共有した。

◎高大連携教育フォーラム「京都高大連携研究協議会主催」（12/ 6 京都市）に参加した。（参加者：竹内准教授）

2．今後の課題、方向性

教職センターは平成25年度から、学内他組織に準じて、組織的にFD活動に取り組み始めた。平成25年度は活動の在り方を模索する段階であったが、平成26年度においては、次の諸課題について、具体的な活動成果が上がるよう取り組みを強化する。

1）文部科学省からの通知・通達に対応した授業内容の見直し、改善

2）文部科学省からの通知・通達に対応したシラバスの見直し、改善

3）名城大学における教職課程開設学部の教員養成理念に基づくシラバス、授業内容の確認と改善の検討

4）教職センター所属教員の教育改善に向けた教育実践の交流

5）学生の要望を踏まえた授業等の見直し、改善

3．活動記録

回	日　程	議　題
1	平成25年９月10日	教員養成理念・構想の作成について
2	平成25年９月24日	教員養成理念・構想の作成について≪継続≫
3	平成25年10月29日	FD取組の推進について
4	平成25年11月12日	文部科学省「教職課程におけるいじめ防止等に関する内容の取扱いについて」に基づく取扱いについて
5	平成25年12月24日	平成26年度『教職入門』シラバスの検討方法について

5．トピックス

第15回 FD フォーラム実施報告

10月30日（水）、天白キャンパス11号館５階504教室において、第15回 FD フォーラム（主催：名城大学 FD 委員会・大学教育開発センター）を開催した。今回は、「いかにして学生の主体的な学習の場をつくるか」をテーマとし、教職員、学生、他大学関係者等84名が参加して行った。

はじめに、中根敏晴学長が、「本フォーラムを通し、学生主体の取組から教員も刺激を受けていただきたい」との開会挨拶があり、FD 委員長でもある森川章副学長が、「教育と共育」をテーマに、教員が学生を教え育てるだけではなく、学生によって教師もまた育てられるという、教師と学生が共に育つという観点の重要性を説明した。

第１部は、薬学部の大津史子准教授と学生の鈴木亮平さんが「学生フォーラム」をテーマに講演。プログラムの紹介をするとともに、企画を通じた学生自身の成長と、それを教員が実感するための教員の学びの場としての効果について発表を行った。続いて、第２部は、経済学部から渋井康弘教授、学生の杉山文規さん、柴田侑里さんが、経済学部の取組「ゼミナールレポートフェスティバル」について講演。企画の狙い、沿革、運営方法を中心に、教師のアドバイスと学生の主体性でつくる学生学会による学びの成果について発表した。

全学意見交換会では法学部の前田智彦教授をファシリテーターとし、学部からの意見・質問を基に、活発な意見交換が行われた。

最後に、森川章 FD 委員会委員長から、今後も各学部等の教育改善の経験交流を進めていきながら各学部・研究科主体の FD 活動を推進していきたいとの総括をもって、第15回 FD フォーラムを終了した。

第15回　FDフォーラム　所属別参加状況

	所属人数（※１）	ＦＤフォーラム		
		参加人数	参加率	前回参加人数
教育職員				
学長・副学長	4	3	75.0%	3
法学部	39	1	2.6%	5
経営学部	35	5	14.3%	2
経済学部	32	10	31.3%	7
理工学部	179	4	2.2%	10
農学部	52	1	1.9%	4
薬学部	69	11	15.9%	11
都市情報学部	28	1	3.6%	1
人間学部	22	8	36.4%	14
大学院理工学研究科	0	0	0.0%	0
大学院法務研究科	16	0	0.0%	0
総合学術研究科	0	0	0.0%	0
大学院大学・学校づくり研究科	4	1	25.0%	1
教職センター	6	0	0.0%	0
情報センター	1	1	100.0%	1
総合研究所	1	0	0.0%	0
総合数理教育センター	2	0	0.0%	1
大学教育開発センター	4	1	25.0%	1
小計 1	494	47	9.5%	61
非常勤講師（※３）	-		-	
小計 2				
事務職員				
監査室	3	0	0.0%	0
秘書室	3	1	33.3%	1
経営本部	12	1	8.3%	0
MS ‐ 15 推進室	-	-	-	-
新学部開設準備室	2	0	0.0%	0
総合政策部	7	5	71.4%	6
総務部	13	0	0.0%	2
渉外部	7	0	0.0%	2
財政部	12	2	16.7%	3
施設部	11	0	0.0%	0
入学センター	12	0	0.0%	0
学務センター	28	6	21.4%	5
教職センター	3	1	33.3%	0
保健センター	4	0	0.0%	6
大学教育開発センター	8	6	75.0%	3
学術研究支援センター	9	0	0.0%	2
キャリアセンター	16	1	6.3%	0
国際化推進センター	4	0	0.0%	0
情報センター	6	0	0.0%	1
附属図書館	7	0	0.0%	1
法学部	5	0	0.0%	1
経営学部	5	0	0.0%	2
経済学部	6	5	83.3%	8
理工学部	15	0	0.0%	0
農学部	14	0	0.0%	2
薬学部	10	3	30.0%	1
都市情報学部	6	0	0.0%	2
人間学部	4	1	25.0%	0
附属高校	5	0	0.0%	0
小計	237	32	13.5%	48
役員				
役員（※２）	7	0	0.0%	2
その他				
附属高等学校教諭	97	0	0.0%	0
学部生・大学院生	-	3	-	1
その他	-	2	-	12
小計	-		-	13
合計	878	84	-	124

※１　平成 25 年度所属人数（教員…助手を含む。特任教授は含まない。／事務職員…契約職員を含む。派遣職員は含まない。）
※２　学長・副学長は除く。（教育職員「学長・副学長」に含む。）
※３　研究員含む

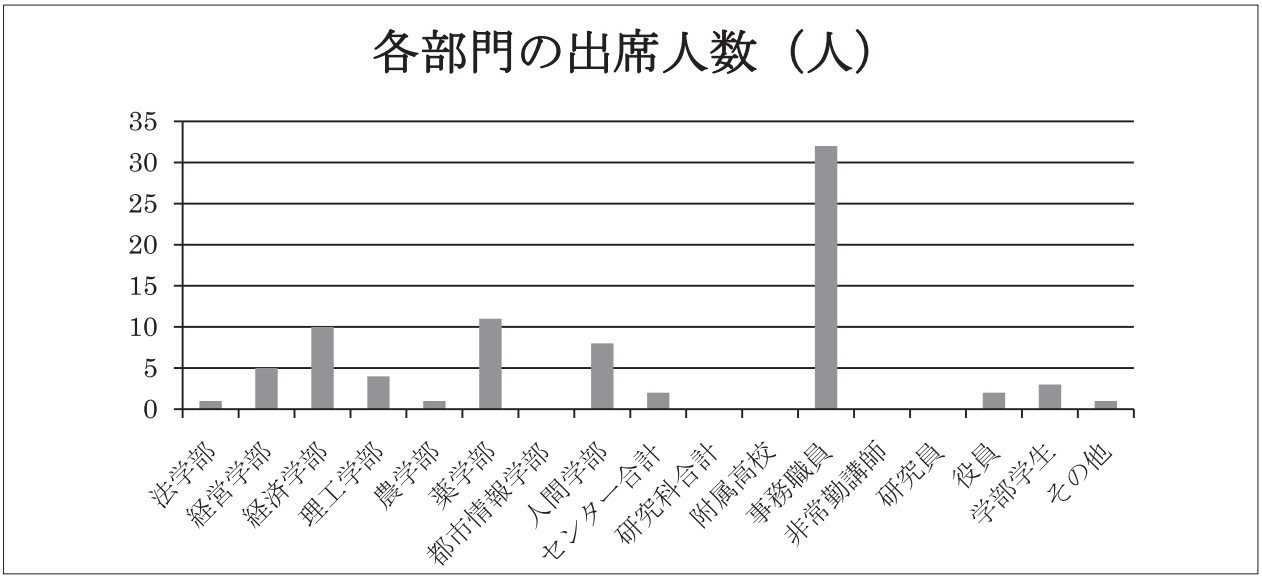
第15回FDフォーラム
参加者アンケート集計結果

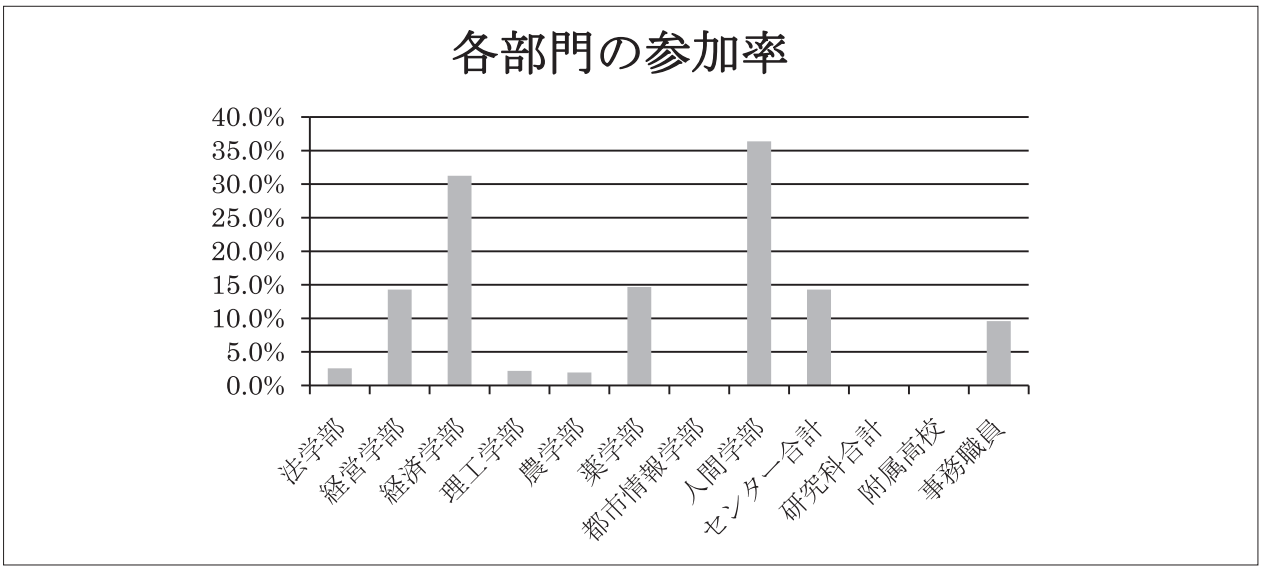
1. 参加者のデータ

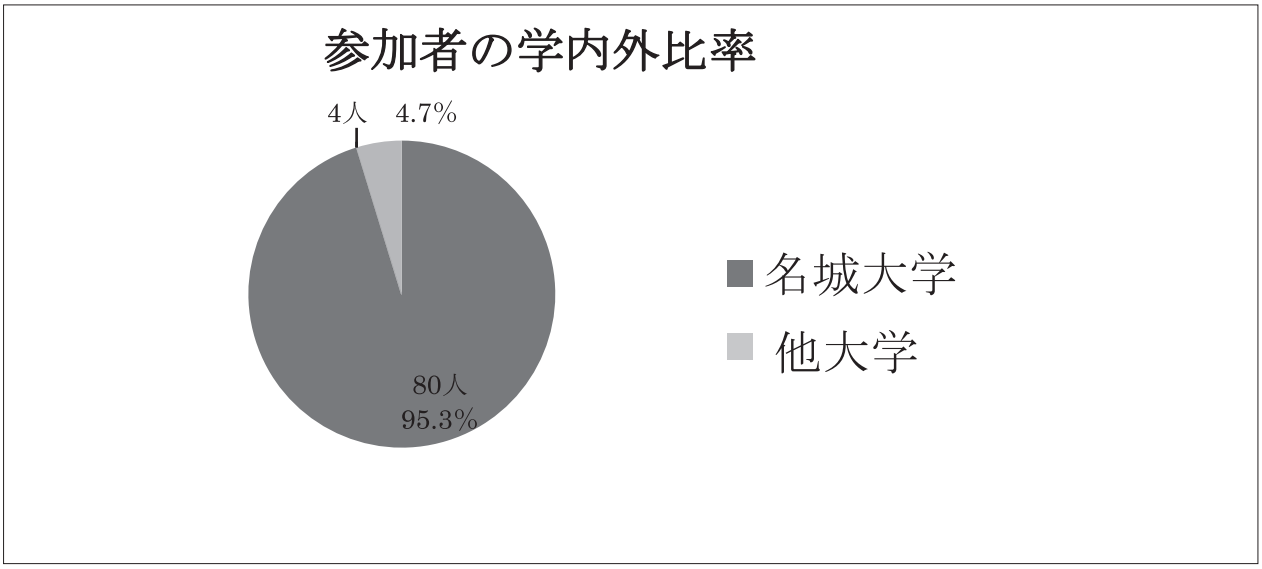
① 参加者の属性（表）

所属等		出席人数（人）	在籍者数（人）	各部門の参加率（%）	参加者の構成比率（%）	学内外人数（人）	学内外比率（%）
名城大学	法学部	1	39	2.6%	1.2%	80	95.2%
	経営学部	5	35	14.3%	6.0%		
	経済学部	10	32	31.3%	11.9%		
	理工学部	4	184	2.2%	4.8%		
	農学部	1	52	1.9%	1.2%		
	薬学部	11	75	14.7%	13.1%		
	都市情報学部	0	28	0.0%	0.0%		
	人間学部	8	22	36.4%	9.5%		
	センター合計	2	14	14.3%	2.4%		
	研究科合計	0	4	0.0%	0.0%		
	附属高校	0	96	0.0%	0.0%		
	事務職員	32	334	9.6%	38.1%		
	非常勤講師	0	—	—	0.0%		
	研究員	0	—	—	0.0%		
	役員	2	10	20.0%	2.4%		
	学部学生	3	—	—	3.6%		
	その他	1	—	—	1.2%		
他大学	教育職員	1	—	—	1.2%	4	4.8%
	事務職員	2	—	—	2.4%		
	民間企業	1	—	—	1.2%		
	他大学生	0	—	—	0.0%		
	その他	0	—	—	0.0%		
計		84			100.0%	84	100.0%

② 参加者の属性（グラフ）


各部門の出席人数（人）
35
30
25
20
15
10
5
0
法学部
経営学部
経済学部
理工学部
農学部
薬学部
都市情報学部
人間学部
センター合計
研究科合計
附属高校
事務職員
非常勤講師
研究員
役員
学部学生
その他


各部門の参加率
40.0%
35.0%
30.0%
25.0%
20.0%
15.0%
10.0%
5.0%
0.0%
法学部
経営学部
経済学部
理工学部
農学部
薬学部
都市情報学部
人間学部
センター合計
研究科合計
附属高校
事務職員


参加者の学内外比率
4人
4.7%
80人
95.3%
名城大学
他大学

2．アンケートデータ

① アンケート回答者の属性（表）

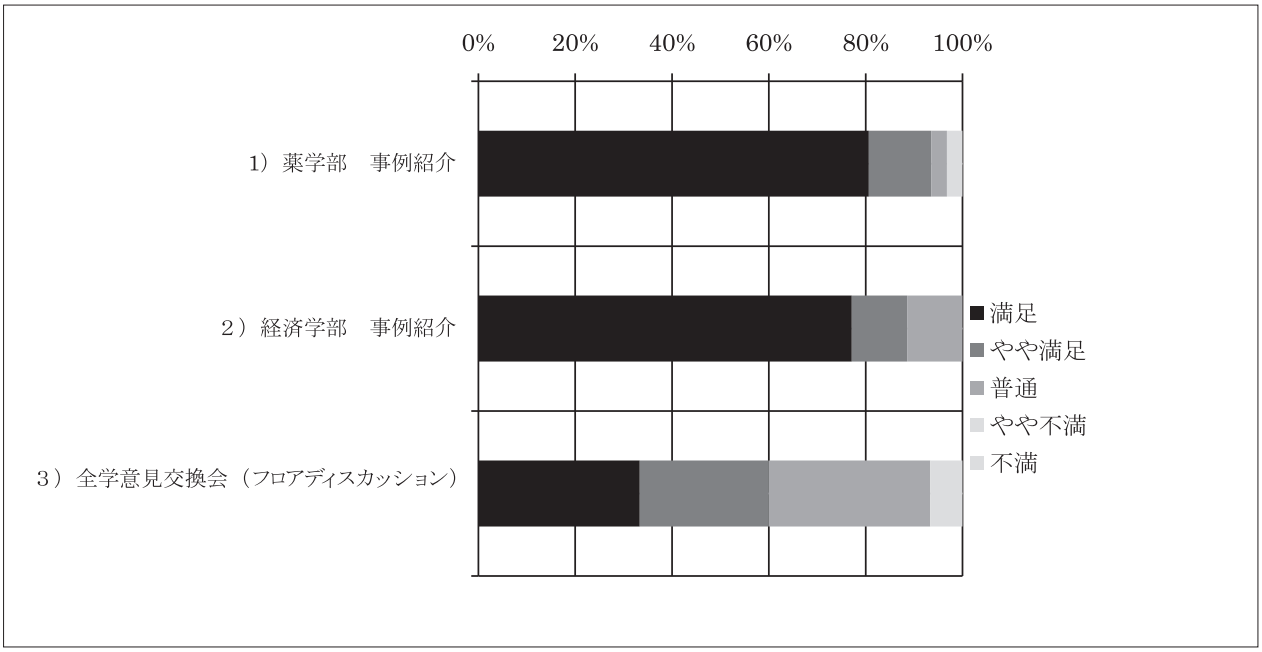
所属等		回答者数（人）
名城大学	専任教員	30
	非常勤講師	0
	職員	24
	大学院生	0
	学部学生	1
	その他	0
他大学	教員	4
	職員	4
高等学校	教員	0
	職員	1
その他		4
計		68

② 各プログラムの満足度（表）

第１部　名城大学における今後のFD活動に向けて セッション名	各項目の回答者数（人）					
	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	計
１）薬学部　事例紹介 「大学活性化を目的とした学生フォーラム」 話題提供:薬学部　大津史子准教授、学生（薬学部）	25	4	1	1	0	31
２）経済学部　事例紹介 「ゼミナールレポートフェスティバル」 話題提供:経済学部　渋井康弘教授、学生(経済学部)	27	4	4	0	0	35
３）全学意見交換会（フロアディスカッション）	5	4	5	1	0	15

割合（%）	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	計
１)薬学部　事例紹介	80.6%	12.9%	3.2%	3.2%	0.0%	100.0%
２)経済学部　事例紹介	77.1%	11.4%	11.4%	0.0%	0.0%	100.0%
３）全学意見交換会（フロアディスカッション）	33.3%	26.7%	33.3%	6.7%	0.0%	100.0%

③　各プログラムの満足度（グラフ）



3. 今回のフォーラムの中で、一番関心を持ったポイント、重要だと感じたポイントについて（自由記述まとめ）

【ＦＤの在り方】

- 「強制ではなくやんわりとしたアプローチ」という考え方に共感した。（教員）
- 学生にいかに興味を持たせる事ができるか、をどのように実践するかが重要。（教員）
- 大学全体としての目標と、教員個人の目標をいかに位置付けるかが重要。（教員）
- 職員も裁量任せではなく、主体的に関わるべきと感じた。（職員）
- 学生を甘やかしすぎではないか。（学生）

【ＦＤに対する改善案】

- 個人単位ではなく、グループあるいは学部・大学単位でのＦＤが大事。（教員）
- 初年次教育を特に重視したい。（教員）
- 授業サロンの試みは、自身の授業の進め方を客観化する上で面白い。（教員）
- 学部学科に関係なく、経験を交流できる機会を作る事。（職員）

【大学への要望】

- 新任教員への授業技術研修を実施してほしい。（教員）
- 教育改善への努力をより評価してほしい。（教員）
- マクロな視点でＦＤ活動を行う為には、目標設定が必要では。（教員）

【ＦＤフォーラムを通じた参加者の感想】

- 中部大の取組を聞いて、組織的な取組が大事である事が理解できた。（教員）
- 成果計測と、結果を受け止めつつ、活動を長期的に発展させていく事が大事。（教員）
- 小手先だけの FD では不十分なのだと感じた。（教員）
- ２部のあり方に工夫が必要ではないか？（1 部に比べてトーンが落ちている）（職員）
- FD を実施する多角的視点と組織作り、公開方法の工夫など、大変勉強になった。（教員）
- 教員の参加人数が少ないと感じた。（教員）
- 発表者の意欲は高いが、それを共有する教員の数が少ない事が問題。（教員）

【その他】

- タイムオーバーがあったので、内容のボリュームと時間をマッチングしてほしい。（教員）

4. 第2部の4学部の教育の改善の取組をお聞きになって、所属学部等の教育改善を進める上でヒントになったことなどあればお聞かせください。

【教育改善の必要性】

- 高校時代からの継続した学部入門教育の実践が必要。（教員）
- 高大連携の範囲を広げていきたい。（職員）

【教育改善の方法】

- 推進組織の明確化と共に推進者の増大を図る。（教員）
- 授業が社会で役立っているかを調査すべく卒業生アンケートを実施したい。（教員）
- 事例報告の更なる活性化。（職員）
- より大きいグループでの実践。（教員）
- 今回の取組はいずれも素晴らしいが、ボランティアに依る所が大きく、学部・学科レベルでの取組を模索すべき。（教員）

【その他】

- FD事務局に専任・兼任スタッフが置かれている事に感心した。（他大学教員）

5. ＦＤフォーラムで取り扱ってほしいテーマや企画内容等について、ご意見・ご要望がございましたら下記にご記入ください。

【学びに対する動機づけ】

- 授業外学習の設計　望ましい教室デザインについて。（高校教員）
- 取組を直にうけた学生の生の声を聞いてみたい。（職員）
- 専門分野を学び始めた学生のモチベーションをいかにあげるか。（教員）

【教え方】

- クリッカーなど双方向性授業をする為のツールの紹介。（教員）
- 授業における発声やプレゼン方法、新任教員への研修等の講習をやってほしい。（教員）

【本学の教育改善取組等の取組等】

- 今後の課題についてディスカッションする場がほしい。（職員）
- 教育改善努力を評価する大学の取組が必要。（教員）

【他大学等事例の報告】

- 他大学でのFD取組事例の講演は面白かった。（教員）
- 失敗事例等、もう少し見識を深められるような内容も聞いてみたい。（教員）

第１５回ＦＤフォーラムアンケート

平成２５年１０月３０日（水）

本日は第１５回 FD フォーラムにご参加いただきありがとうございました。
今後のフォーラムの企画をはじめ、FD 活動の取り組みにおいて参考になるご意見をいただきたいと思いますので、本アンケートにご回答くださいますようご協力をお願いいたします。いただきましたアンケートのご意見は、今後の取り組みの参考にさせていただきます。ご記入後は受付に回収箱を用意していますので、退出の際にお入れください。

１．あなたについてお聞かせください。（該当するものに○をつけてください）

【名城大学】 1.専任教員　2.非常勤講師　3.職員　4.大学院生　5.学部学生　6.その他（　　）
【他 大 学】 7.教員　　8.職員
【高等学校】 9.教員　　10.職員
【そ の 他】 11.その他（　　）

２．本日の企画内容についてお聞かせください。

プログラム名	該当するものに○を付けてください。				
１．薬学部　事例紹介 「大学活性化を目的とした学生フォーラム」 話題提供：薬学部　大津史子准教授、学生(薬学部)	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
２．経済学部　事例紹介 「ゼミナールレポートフェスティバル」 話題提供：経済学部　渋井康弘教授、学生（経済学部）	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
３．全学意見交換会	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満

３．今回のフォーラムの中で、一番関心を持ったポイント、重要だと感じたポイントについて、具体的にお聞かせください。

（　　）

4.　学部の教育改善の取組をお聞きになって、所属学部等の教育改善を進める上でヒントになったことなどがあればお聞かせください。

（　　）

5.　ＦＤのフォーラムで扱ってほしいテーマや企画内容等について、ご意見・ご要望がございましたら下記にご記入ください。

（　　）

ご協力ありがとうございました。

名城大学　ＦＤ委員会

当日配布資料

1

レポートフェスティバル

共に育つ学生の学会

経済学部

2

（１）レポートフェスティバル（レポフェス）の狙い：学生の学会

①各ゼミの一番光るところを披露し合おう

②お互いに耳の痛いことを言い合える関係を作ろう

＊研究対象も研究方法も様々なゼミがそれぞれの良さ出し合うことが目的

→コンテストが目的ではない！

3

（２）沿革：ゲリラ活動から学部行事へ

①出発点は5つのゼミの自主的な企画（2002年）
→学生、教員が一緒に手弁当で手作り。

②2007年に学部行事として認定
→参加ゼミの増加による認知度アップ。
援助金支給へ。

4

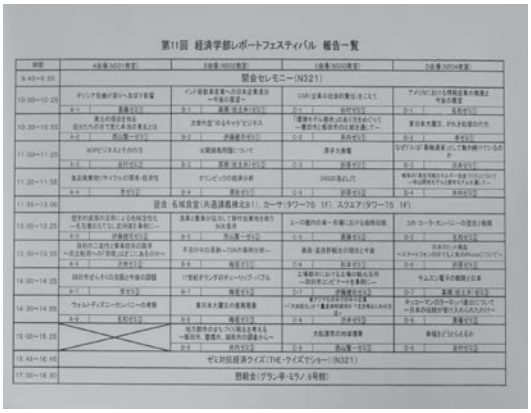
（３）運営方法：教員が仕掛け、学生が作る

①教員が共同で段取り
（参加呼びかけ、予稿集編集、報告会場の準備、懇親会、報告集編集）。
→ここでの相談がFD活動にもなっている。

②報告のための準備は各ゼミ独自に
→報告内容や方法の決定。研究の進め方。
報告資料の作成。発表の練習。

＊教師のアドバイスと学生の主体的な取り組み。
もちろんゼミの時間外も自主的に！

5


第11回 経済学部レポートフェスティバル 報告一覧

時間	4会場(N321教室)	3会場(N501教室)	2会場(N504教室)	2会場(N504教室)
9:45～9:55	開会セレモニー(N321)			
10:00～10:25	ギリシア危機が問いあぶり出す教訓	インド自動車産業への日本企業進出 ～今後の展望～	GSP(企業市民総合評価)に生こたえて	アメリカにおける情報産業の発展と今後の展望
	ＡＴ１ 斉藤（ゼミ）	ＢＴ１ 斉藤（主主本）（ゼミ）	ＣＴ１ 長村（ゼミ）	ＤＴ１ 長村（ゼミ）
10:30～10:55	東北の現状を考える 自分たちの目で見た東北の東北とは	次世代型"ゆるキャラ"ビジネス	「環境モデル都市」のあり方をめぐって ～豊田市と藤枝市の比較を通じて～	東日本大震災、ＩＴ化と社会の代替
	ＡＴ２ 西山（第一ゼミ）	ＢＴ２ 伊藤（ゼミ）	ＣＴ２ 長村（ゼミ）	ＤＴ２ 長村（ゼミ）
11:00～11:25	ＳＯＨＯビジネスとその行方	与那国島問題について	原子力発電	ＩＴ（ＩＣＴ）が「業務改革」として取り組まれている点
	ＡＴ３ 長村（ゼミ）２	ＢＴ３ 斉藤（主主本）（ゼミ）２	ＣＴ３ 伊藤（ゼミ）２	ＤＴ３ 大木（ゼミ）２
11:30～11:55	食品偽装問題(サイゼリヤの現場・社会性)	オリンピックの経済分析	3000億円	地方の「商工市民センター」設立プロジェクトについて ～中山間地モデルと都市モデルの違いを～
	ＡＴ４ 李（ゼミ）２	ＢＴ４ 長村（ゼミ）２	ＣＴ４ 伊藤（ゼミ）２	ＤＴ４ 長村（ゼミ）２
11:55～13:00	昼食：各自自宅(共通講義棟北B1)、カーサ(タワー7Ｆ 1Ｆ)、スクエア(タワー7Ｆ 1Ｆ)			
13:00～13:25	歴史的経済の法則による地球温暖化 ～名古屋はどうでしょう？ ～	食品と農業が協力して研究開発を進ち ＨＡＣＣＰ	ヨーロッパ諸内の単一市場における規格統一	３Ｄ（コーラ・ガンバーレ）の歴史と戦略
	ＡＴ５ 伊藤（ゼミ）２	ＢＴ５ 西山（第一ゼミ）２	ＣＴ５ 斉藤（ゼミ）２	ＤＴ５ 長村（ゼミ）２
13:30～13:55	現在の二酸化と東海地方の現状 ～自主転用へ！？ 評価はどこにあるのか～	不況の中の産業～70年の事例分析～	南海・東南部地方の現状と今後	日本のＩＴ戦略 ～スマートフォンの中でＮＥＴＷＥＢｏｎｅについて～
	ＡＴ６ 大木（ゼミ）２	ＢＴ６ 梅宮（ゼミ）２	ＣＴ６ 長谷（ゼミ）２	ＤＴ６ 伊藤（ゼミ）２
14:00～14:25	自分たちゼミ内の活動と今後の課題	21世紀オランダのチューリップバブル	工場排水における工場の廃出活用 ～自社内コンビナートを事例に～	サムスン電子の戦略と企業
	ＡＴ７ 李（ゼミ）２	ＢＴ７ 梅宮（ゼミ）２	ＣＴ７ 伊藤（ゼミ）２	ＤＴ７ 斉藤（主主本）（ゼミ）２
14:30～14:55	ウォルマートとコーカンバーンの考察	東京水力電気の産業発展	「ＥＵ（ヨーロッパ連合）」の成立について ～大航海時代から「重商主義時代」へ「ＥＵ考えられるＥＵ」～	ＤＶＤ（コーラ・ガンバーレ）の歴史について ～日本の伝統が受け入れられたわけ～
	ＡＴ８ 長村（ゼミ）２	ＢＴ８ 梅宮（ゼミ）２	ＣＴ８ 大木（ゼミ）２	ＤＴ８ 斉藤（ゼミ）２
15:00～15:25	×	地方都市のまちづくり 地主を考える ～商店街、農場所、福祉所の調査から～	太陽運用の地球運用	車輪はどうなるか
	×	ＢＴ９ 長村（ゼミ）２	ＣＴ９ 西山（第一ゼミ）２	ＤＴ９ 長村（ゼミ）２
15:45～16:45	ゼミ対抗経済クイズ(THE-クイズ"ビショー)(N321)			
17:00～18:30	懇親会(グランポ・ミラノ/6号館)			

6

7

8

9

10

11

（４）学生の苦しみと成長

苦しんでレポフェスを
乗り越えた学生は、
自信に満ちた姿に！

1

第15回FDフォーラム

第15回FDフォーラム

いかにして学生の主体的な学習の場をつくるか

薬学部　事例紹介

薬学部FD委員会　大津　史子

6年生　鈴木　亮平

1

2

第15回FDフォーラム

薬学部

4年制 → 修士課程 → 博士課程

平成18年～

6年制 → 博士課程

2

3

第15回FDフォーラム

4年生制度の終わり・・・

- 大学院生が「大学院セミナー」を毎週金曜日朝8:30から開催し、自分たちの研究について意見を交換していた。
- しかし、6年制が決定し、修士課程の募集が停止
  →出席者が漸減！

名城薬学部の将来は大丈夫か？

修士課程が終わるということは、研究が後退するのでは？

3

4

第15回FDフォーラム

学生フォーラムのきっかけ

- 名城大学学術フロンティア推進事業
  第三回若手研究者シンポジウムと合同
- 第一回研究・大学活性化を目的とした
  学生フォーラムを開催
- 運営委員
  博士後期課程2，3年を中心に、修士課程2年
- 目的
  - ➢学生の研究に対する士気の向上、研究思考能力の研磨、個人の研究発展による大学活性化
  - ➢他分野の研究にふれることで自分の研究に足りないものや必要なものを取り込む
  - ➢他研究室との情報共有、コラボレーションなどの協調
  - ➢学生自身の成長

教員は、相談にのるのみ。運営には、関わっていません。

4

5

第15回FDフォーラム

学生フォーラム

第1回　2011年

第2回　2012年

第3回　2013年

5

6

学生フォーラム

名城大学　薬学部
学生フォーラム運営委員会
6年　鈴木亮平

6

7

発表内容

- 学生フォーラムの概要
- 私の主体的取り組み
- 学生フォーラム開催後の評価

7

8

学生フォーラムの概要

8

9

学生フォーラムとは

学生の (Forum of the students)
:学生が主体の学びの場

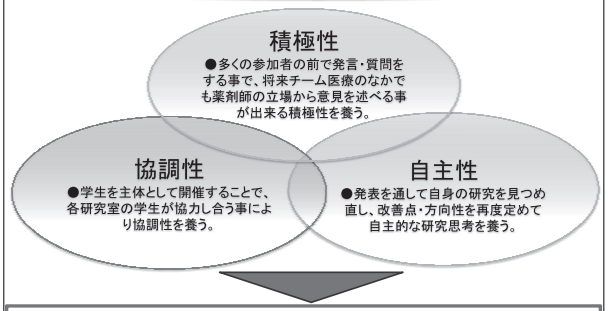
学生による (By the students)
:全て学生が企画・立案の学びの場

学生のためのフォーラム (For the students)
:3つの柱　積極性、協調性、自主性を育む学びの場

9

10

学生フォーラムの目的



活発な研究・大学の発展と優れた薬剤師素質を有する社会人の輩出に寄与することを大きな目的とする。

10

11

学生フォーラムのメインテーマ

◆第1回(2011年):協調と成長
◆第2回(2012年):さらなる飛躍へ
◆**第3回(2013年):広がる可能性**

＊上級生:これまでの学習を振り返り、これから薬剤師となる上で自分に必要となることは何かを考える。
＊下級生:上級生が取り組んでいること、これからできることを知ってもらい視野を広げる。

11

12

学生フォーラムのプログラム

◆開催日時:2013年4月20日(土)
① 研究発表
② 研究室紹介
③ 連携病院実務実習報告
④ 特別招待講演

12

13

①研究発表の目的

◆ターゲット：上級生
＊自らの研究を見直す機会にすること
＊他の発表や意見交換から、自らの研究の発展へつながるヒントにすること
＊学生同士で発表を行うことで刺激を受け、今後の研究、勉強への向上心につなげること

13

14

①研究発表の概要

◆28演題
◆発表時間：10分
質疑応答：5分

◆30演題
◆示説時間：60分

・他研究室の学生・教員と、いつもとは違った視点で意見交換ができた。

14

15

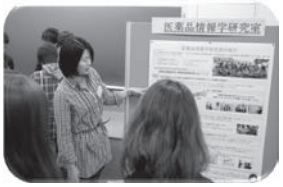
②研究室紹介の目的

◆ターゲット：下級生
＊個々の研究室の研究内容知ってもらうこと
＊早期から研究に興味を持ってもらうこと
＊研究室生活の情報交換を行うこと
＊研究に対する疑問や不安を解消すること

15

16

②研究室紹介の概要



◆参加研究室：16研究室
◆各研究室の配属学生が紹介用ポスターを作成
◆紹介時間：1時間

・下級生が研究室をより身近に知る機会となった。

16

17

③連携病院実務実習報告の目的

◆ターゲット：下級生
＊実務実習に対する具体的なイメージを持ってもらうこと
◆ターゲット：上級生
＊各病院で学んだこと・考え方を共有すること

17

18

③連携病院実務実習報告の概要

↓全体説明

↓パネルを用いた説明

◆連携4病院の実務実習内容と特徴のある取り組みの紹介
◆各病院ごとにパネルを用いた質疑応答を実施

・実習前の下級生は実務実習に対する具体的なイメージをもつ機会となった。
・実務実習後の上級生は各病院間で学んだことを共有できた。

19

④特別招待講演の目的

◆ターゲット：上級生・下級生
- ＊臨床現場で活躍する薬剤師の話を聴いて、将来の自分の薬剤師像について考える機会とすること
- ＊今後の勉強・研究へのモチベーション維持、向上につなげること

19

20

④特別招待講演の概要

◆演題名
- ●薬剤師による臨床研究の実践について
- ●救命救急センターにおける薬剤師の挑戦

・臨床現場でのリサーチマインドの必要性を知ることができた。
・新しい職能での今後挑戦していくべきことを学ぶことができた。

20

21

運営委員会組織図

学生フォーラム運営委員(18名)
- 委員長
- 副委員長
- 開催告知 ／ 外部告知
- 協賛・後援依頼 ／ 演題募集
- 研究室紹介 ／ 出版社連絡
- 特別招待講演 ／ 当日準備
- 実務実習報告 ／ アンケート
- プログラム(冊子)作成 ／ 会計

アドバイザー(4名)
大学院生・前フォーラム委員

当日スタッフ(36名)
- 座長
- PCオペレーター
- 照明
- マイクランナー
- カメラ

21

22

より多くの学生に主体的に参加してもらう工夫

- ガイダンス時でのアナウンス
- ポスターの掲示

↓ 座長 ↓

- 座長、司会として参加してもらう
- 会場運営(タイムキーパー、照明、PC操作、マイクランナーとして参加してもらう)

質問者→

マイクランナー→

22

23

学生が自ら主体作りあげる！

◆プログラム、要旨集の作成
◆特別招待講演の依頼
◆会場設営、会場案内のポスター作製　など

右図：作成したプログラム集

23

24

私の主体的な取り組み

- 学生フォーラムの運営委員として
- 参加者として

24

25

学生フォーラムの運営に加わるきっかけ

- 熱心な同級生に感化されて
- 昨年の運営委員の姿をみて
- 協力できる仲間がいた

25

26

運営委員として取り組んだ結果

Before		After
どちらかというと個人中心	➡	全体(チーム)で協力
人に頼まず自分でやってしまう	➡	人に頼むことで、その人を成長させることに気付いた
軽い気持ち	➡	責任感を意識する

26

27

発表者として取り組むきっかけ

- 自分の研究を多くの人に知ってもらえる機会
- 研究結果をまとめる機会
- 指導していただける先生の協力がある

27

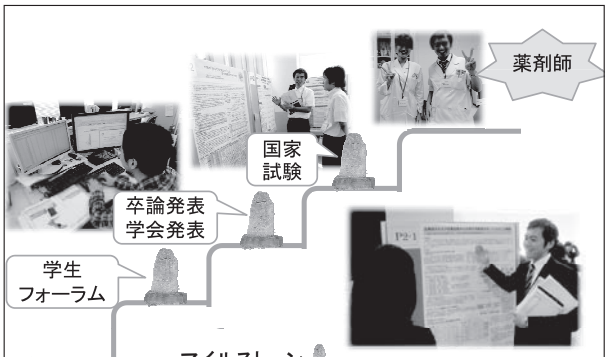
28

参加者として取り組んだ結果

Before		After
目の前のことしか見ていない	➡	今やっていることが何につながるかを意識できる
不安・心配	➡	自信がついた
狭い視野	➡	広い視野
あまり考えない	➡	深く、理論的に考える

28

29



マイルストーン
大きな目標を達成するにあたり、より小さな単位の目標を立て、それらのチェックポイントとして進歩管理や途中成果を行うやり方、もしくはその1つの目標のこと

29

30

学生フォーラム開催後の評価

30

31

参加者数・発表演題数

↓参加者数

第1回 200名

第2回 250名

第3回 544名

↓発表演題数

第1回 44演題

第2回 40演題

第3回 58演題

参加者内訳(544名)

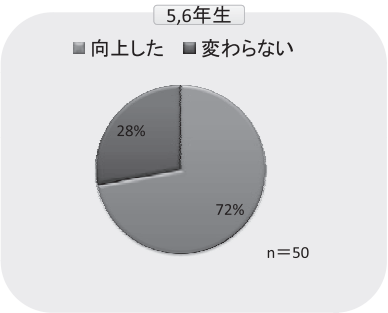
1年生： 6名　大学院生： 5名
2年生： 14名　教職員：30名
3年生： 58名　一般：25名
4年生：173名
5年生：118名
6年生：115名

アンケート回答者数　176人(学生、教職員、一般)

31

32

学生フォーラムの参加により研究に対する士気・意欲が向上したか？



32

33

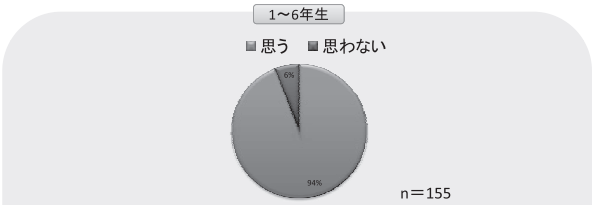
学生フォーラムは自分自身の成長につながると思うか？

◆成長につながると思う理由
＊多少なりと自分の将来の方向性を得ることができたと思う。
＊様々な知識、情報が得られるから。
＊学びたい分野をより知ることができるから。
＊周りの人ががんばってると、刺激になる。
＊発表のために自分の分野の勉強をしたから。
＊自分の知らなかった面白いことが見つかる上、発表のコツを学べるから。

33

34

本フォーラムは大学の活性化につながると思うか？



◆大学の活性化につながると思う理由
＊生徒同士、生徒と先生の間での情報・意見交換だけでなく、大学の活動の広報の場にもなると思う。
＊各研究室間の情報の共有が行われるため。
＊お互いの実験内容を知ることで、得るものがあるから。

34

35

参加者の感想 (自由記載の抜粋)

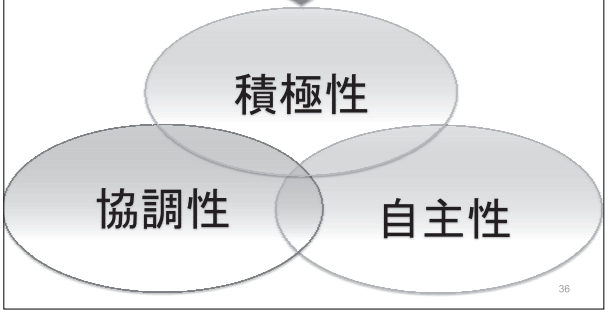
＊自分はこれからどのような道へ進んでいくのかを考えたりする、いい機会となった。
＊意見交換の場として、非常に有意義な時間だった。
＊自分たちの研究成果をまとめる良い機会でした。
＊今回学生フォーラムに参加することで学会をイメージすることができ、今後の学会等への参加意欲向上につながりました。

35

36

まとめ

学生フォーラムの運営、参加



36

37

継続する工夫

- 先輩が頑張る姿を後輩にみせる
- 学年を越えて声をかけ、参加するきっかけを作る
- 上級生が下級生をサポートする
- 教員、職員のサポートを得る
- 外部へアピールして社会的な評価を得る

37

38

外部へのアピール

◆専門商業雑誌(月刊薬事)の取材
◆名城薬学後援会だよりへの掲載
◆日本薬学会での取り組みの報告

38

39

まとめ

学生フォーラム

＊学生自身も成長し、大学の活性化にもつながる
＊活発な研究・大学の発展と優れた薬剤師素質を有する社会人の輩出に寄与できると考える

39

40

第15回FDフォーラム

いかにして学生の主体的な学びの場をつくるか

薬学部FD委員会
大津　史子

40

41

第15回FDフォーラム

学生フォーラム

- 最初は、引っ張られて→主体的では決してない
- 先輩の熱い思いや姿勢に触れているうちに・・
- なんかかっこいいかも・・・・
- やらされてみたら、なんかできたかも・・・
- 誉められた・・・・心地よい！
- できた！　達成感！
- もうちょっとがんばってみよう・
- 自分でもできるじゃん・・・・

PBL
Project
Based
Learning

主体的な学びのきっかけ

41

42

第15回FDフォーラム

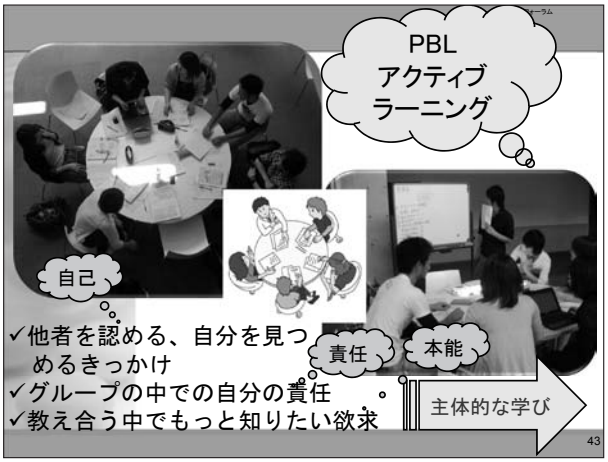
薬学部

多様な学びの機会の提供

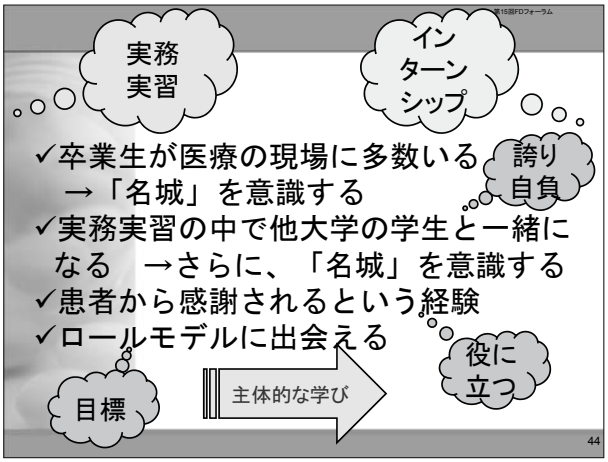
- サービスラーニング
- PBL アクティブラーニング
- 卒業研究
- 実務実習
- 卒論発表会
- 学会発表
- インターンシップ

42

43



44

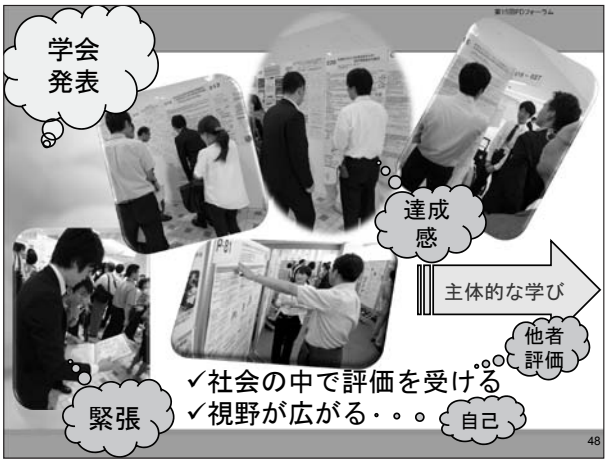


45

46

47

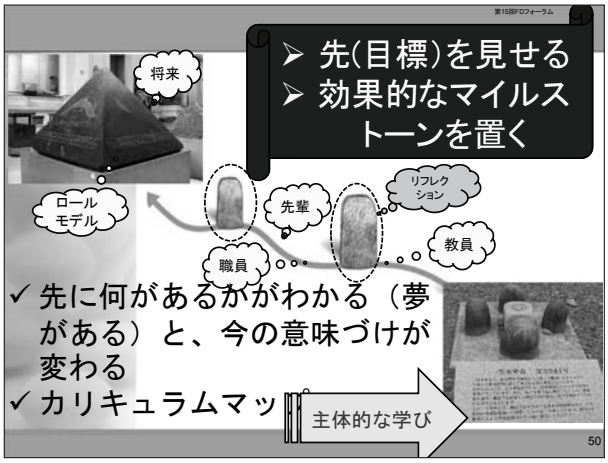
48



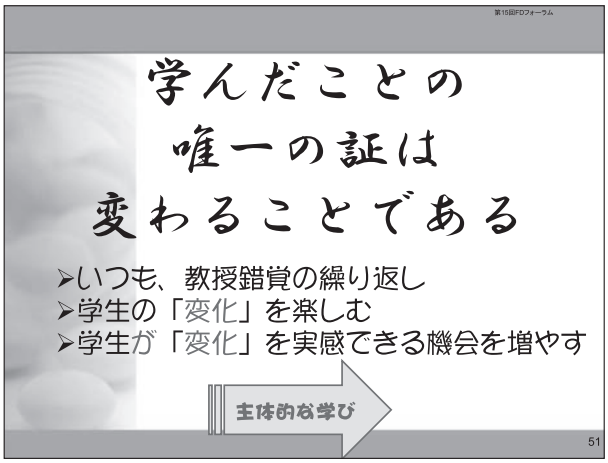
49

学会
主催
✓任せる→周りをみて、自分の行動を考え、自分たちで成長！
✓特殊環境＝飛躍のきっかけ
責任
緊張
他者
評価
主体的な学び

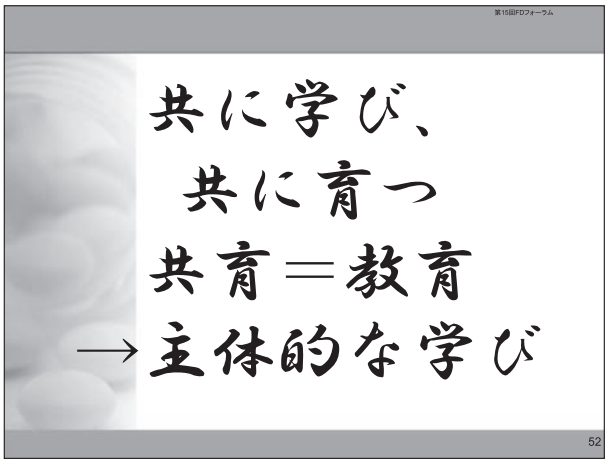
50


第15回FDフォーラム
➢ 先(目標)を見せる
➢ 効果的なマイルストーンを置く
将来
ロール
モデル
先輩
リフレクション
職員
教員
✓ 先に何があるかがわかる（夢がある）と、今の意味づけが変わる
✓ カリキュラムマッ
主体的な学び
50

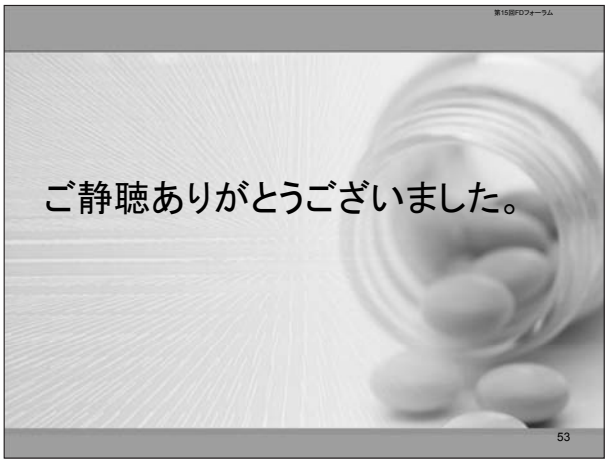
51


第15回FDフォーラム
学んだことの
唯一の証は
変わることである
➢いつも、教授錯覚の繰り返し
➢学生の「変化」を楽しむ
➢学生が「変化」を実感できる機会を増やす
主体的な学び
51

52


第15回FDフォーラム
共に学び、
共に育つ
共育＝教育
→主体的な学び
52

53


第15回FDフォーラム
ご静聴ありがとうございました。
53

教育功労賞表彰報告

ＦＤ委員会では、平成25年度教育功労賞の募集を行いました。

教育功労賞制度とは、職員の教育改善に対する意識を高め、組織の活性化を図り、本学の教育の質の向上に資することを目的として、各学部及び研究科等において、教育活動及び教育改善に大きく貢献した専任教員またはグループ（事務職員を含む）を表彰するものです。

今年度が初めての表彰となり、下記６件を今年度の教育功労賞表彰者としました。

氏名および教育活動のテーマは下記のとおりです。

記

No.	表彰者等名	所属学部等	単独・グループ	活動・テーマ
1	佐川　雄二	理工学部・情報工学科	単独	理工学ナビゲーションシステムの提案・導入
2	新井　宗之	理工学部	単独	教育・学生指導等支援の WEB システムの構築
3	立川　剛	理工学部・建築学科	単独	家具転倒防止ボランティア活動 名城大学「かぐ転防」隊
4	理工学部教養教育及び理工学部教務事務担当（学務センター）	理工学部	グループ	不登校学生早期発見のための支援取組（授業出席状況の把握と面談指導）
5	土屋　照二	農学部・附属農場	単独	春日井市と名城大学農学部との連携事業の推進
6	薬物治療学運営グループ	薬学部	グループ	薬学型 PBL 支援プログラムの構築

以上

6. 資　　料

ＦＤ委員会要項

（目的及び設置）

第１条　名城大学学則第24条の２及び名城大学大学院学則第19条の２の規定に基づき、教育の質の向上に向けた全学を対象としたファカルティ・ディベロップメント（以下「ＦＤ」という。）の活動の実施及び各学部等のＦＤ活動を支援するため、ＦＤ委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（任務）

第２条　委員会は、次の事項について検討及び実施する。

⑴　本学の教育内容及び教育環境の改善に関する事項

ア　単位制度の機能化に関する事項

イ　ＦＤの啓発活動に関する事項

⑵　教員の教育力向上に関する事項

ア　授業改善アンケートの企画及び実施、結果の集計・分析・公表、並びにこれらに係る各学部等の取組の支援に関する事項

イ　授業改善の取組に関する事項

ウ　教育上の功労に対する褒賞に関する事項

⑶　その他委員会が必要とする事項

（組織）

第３条　委員会は、次の委員をもって組織する。

⑴　副学長のうち１名

⑵　大学教育開発センター長

⑶　学務センター長のうち１名

⑷　各学部から選出された教育職員１名

⑸　各独立研究科から選出された教育職員１名

⑹　教職センターから選出された教育職員１名

⑺　大学教育開発センター事務部長

⑻　学務センター事務部長のうち１名

⑼　キャリアセンター事務部長

⑽　その他委員長が必要と認めた者

（委員長及び副委員長）

第４条　委員会に、委員長及び副委員長を置く。

②　委員長は、副学長を充てる。

③　副委員長は、大学教育開発センター長を充てる。

（任期）

第５条　第３条第４号から第６号まで及び第10号の委員の任期は、２年とする。ただし、再任を妨げない。

②　委員が欠けた場合の補充委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（会議）

第６条　委員会は、委員長がこれを招集し、その議長となる。

②　委員長に事故あるときは、副委員長がその職務を代行する。

③　委員会は、委員の過半数の委員の出席により成立する。

④　委員会の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数の場合は、議長がこれを決する。

（委員以外の出席）

第７条　委員会は、必要に応じて委員以外の者の出席を求め、意見又は説明を聴くことができる。

（小委員会の設置）

第８条　委員会は、必要に応じて小委員会等を置くことができる。

（事務）

第９条　委員会の事務は、大学教育開発センターで分掌する。

附　則

この要項は、平成25年４月１日から施行する。

平成25年度　所属別ＦＤ活動参加状況

所属			所属人数（※1）	H25前期授業改善アンケート	H25後期授業改善アンケート	FDフォーラム	教育功労賞（※2）	教育年報 研究論文投稿（※3）	教育年報 実践報告投稿（※3）	学外セミナー・研究集会等への派遣
教員	学長・副学長		4	3	2	3				
	法学部	法学科	22	17	17	1				
		応用実務法学科	17	16	16					
		計	39	33	33	1				
	経営学部	経営学科	21	17	15	3				
		国際経営学科	14	13	13	2				
		計	35	30	28	5				
	経済学部	経済学科	20	14	16	4				
		産業社会学科	12	11	8	6				
		計	32	25	24	10				
	理工学部	理工学部	2	0	0	1				
		数学科	19	18	17					
		情報工学科	19	17	13	1	1			
		電気電子工学科	19	13	14	1				
		材料機能工学科	11	9	10					
		応用化学科	8	4	6					
		機械システム工学科	16	12	12					
		交通機械工学科	15	13	12					
		メカトロニクス工学科	9	4	6					
		社会基盤デザイン工学科	14	10	13		1			
		環境創造学科	14	9	8					
		建築学科	17	13	14		1			
		教養教育	16	12	11	1	16			
		計	179	134	136	4	19			
	農学部	農学部	6	1	1					
		生物資源学科	14	9	9					
		応用生物化学科	13	12	11					
		生物環境科学科	13	11	11	1				
		教養教育等	2	1	1					
		附属農場	4	0	0		1			
		計	52	34	33	1	1			
	薬学部	薬学科	66	35	33	11	4	35	2	1
		総合基礎部門	1	0	1					
		ラジオアイソトープ実験施設	1	0	0					
		分析センター	1	0	0					
		計	69	35	34	11	4	35	2	1
	都市情報学部	都市情報学科	28	21	20	1		1		
	人間学部	人間学科	22	20	20	8			1	2
	大学院理工学研究科		0	0	0					
	大学院法務研究科		16	0	0					
	総合学術研究科		0	0	0					
	大学院大学・学校づくり研究科		4	4	2	1		1		2
	教職センター		6	6	6	1				
	情報センター		1	1	0					
	総合研究所		1	1	1		1			
	総合数理教育センター		2	2	0					
	大学教育開発センター		4	4	4	1				
	小計		494	353	343	47	1	37		
職員	監査室		3							
	秘書室		3			1				
	経営本部		12			1				1
	新学部開設準備室		2							
	総合政策部		7			5				
	総務部		13							
	渉外部		7							2
	財政部		12			2				
	施設部		11							
	入学センター		12							
	学務センター		28			6				3
	保健センター		4							
	教職センター		3			1				
	大学教育開発センター		8			6				15
	学術研究支援センター		9							
	キャリアセンター		16			1				
	国際化推進センター		4							
	情報センター		6							
	附属図書館		7							
	法学部		5							
	経営学部		5							
	経済学部		6			5				
	理工学部		15				7			
	農学部		14							
	薬学部		10			3	3			
	都市情報学部		6							
	人間学部		4			1				
	附属高校		5							
	小計		237			32	10			
計			821	353	343	79	35	37	3	27

※1　平成25年４月１日現在。
（教員：助手を含む。終身教授、特任教授（１・２・３号）は含まない。／事務職員：契約職員を含む。派遣職員は含まない。）
※2　延べ人数。グループでの申請の場合は構成員もそれぞれ1とカウントする。
※3　延べ人数。共同執筆者もそれぞれ1とカウントする。

７．おわりに

編　集　後　記

大学教育開発センター

名城大学のFD委員会委員の任期は2年間となっています。従って、平成25年度のFD活動は新しい委員でのスタートとなりました。加えて、平成25年度からのFD委員会は、構成員数を半減し、委員会の開催頻度を毎月1回と定例化することで、個々のFD活動についてもFD委員会全体で議論するという、従来とは異なる体制で運営してきました。

平成25年度においても、平成24年度に引き続き、FD活動の方針は、「学部・研究科主体のFD」です。そのため、全学的なFD活動を推進する名城大学FD委員会は、学部の教育改善を支える委員会へのシフトを志向しています。

平成25年度の特記事項としては、各学部・研究科等における教育活動に大きく貢献した者を表彰する「教育功労賞」の制度を新たに立ち上げました。教職員の教育改善に対する意識を高め、組織の活性化を図り、本学の教育の質の向上に資することを目的とし、各学部及び研究科等において、教育活動及び教育改善に大きく貢献した専任教員またはグループ（事務職員を含む）を表彰するために候補者を募集し、今年度は6件を表彰しました。

大学教育開発センターは、名城大学のFD活動を支援する大学教育開発センター長をトップとする事務組織です。平成15年4月に、教育開発を任務とする組織として設置され、それ以降、FDの他、多くの教育改善支援に係る業務を遂行しています。同時に、本学教育における社会的責任を果たすべく、このような取組の成果を学内外に発信することで、大学教育の強みのアピールに貢献してきました。本センターでは、活動目的を「大学の各部門における教育改善の支援を通じて、本学の教育の質の向上に貢献する」として位置づけており、FD委員会の主旨と同じく、学部の教育改善を支えるセンターとして日々業務を遂行しています。

次年度以降の名城大学FD活動及び各学部の教育改善を進めるにあたって、本書が一助となることを願っております。

なお、本書は学内外へ発信させていただくと共に、以下、大学教育開発センターホームページ上でも公開しております。FD以外の教育改善の取組成果についても公開しておりますので、皆様の参考となれば幸いです。

名城大学　大学教育開発センター　URL：http://www.meijo-u.ac.jp/edc/

終わりに、本報告書の企画・編集、各FD活動の企画・運営にご協力いただいた皆様方に御礼申し上げます。

平成26年３月

発　行：名城大学 FD 委員会

編　集：名城大学　大学教育開発センター

住　所：〒４６８－８５０２
名古屋市天白区塩釜口１－５０１

電　話：（０５２）８３８－２０３３
ＦＡＸ：（０５２）８３３－５２３０

MEIJO UNIVERSITY
FOUNDED
1926
NAGOYA JAPAN